

42159

教科書文庫

4
810
42-1919
200030
1955

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

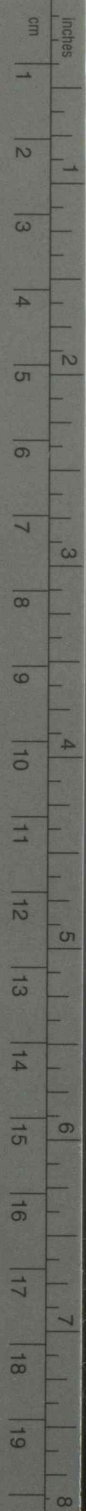


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.0
Y619
資料室

訂女子國語讀本
卷八



大正女子國語讀本

東京



女子國語讀本卷八

金港堂書藉株式會社

吉田彌平
小島政吉
篠田利英
岡田正美
共編

訂四 女子國語讀本卷八

目次

- 一 御即位の大禮 一
- 二 大日本帝國憲法 一三
- 三 暴風雨 文學士 鹽井雨江 一六
- 四 國元なる姉に答ふ(候文) 下田歌子 一九
- 五 旅の心(新體詩) 島崎藤村 二三
- 六 月の天橋(口語文) 德富健次郎 二七
- 七 栗栖野 兼好法師 三二
- 八 石清水 兼好法師 三四

九	鳴子 <small>(俳句)</small>	三五
一〇	夜學.....	三五
一一	夜討會我.....	三七
一二	武將の連歌.....	四四
一三	文を作ること.....	四七
一四	女子と歌.....	五三
一五	女流文學.....	五七
一六	月の桂 <small>(短歌)</small>	六四
一七	叔母に贈る <small>(候文)</small>	六七
一八	叢蘭.....	七一
一九	人生の慰安 <small>(口語文)</small>	七二

二〇	奢侈論.....	男爵 添田壽一	七八
二一	阿波の鳴門.....	近松半二	八三
二二	皇國の姿 <small>(短歌)</small>		九一
二三	芳流閣上の奮闘.....	瀧澤馬琴	九五
	◎八犬傳回外剩筆.....	瀧澤馬琴	一〇三
二四	有王島下り.....	平家物語	一一〇
二五	よせぎれ <small>(狂歌)</small>		一二四
二六	忠度都落.....	源平盛衰記	一二六
二七	カルナバル祭 <small>(口語文)</small>	菊池幽芳	一三一
	◎外國語の遣ひ方 <small>(口語文)</small>	法學博士 農學博士 新渡戸稻造	一四四
二八	日本民族の發展の現況.....		一四九

訂四 女子國語讀本卷八目次終

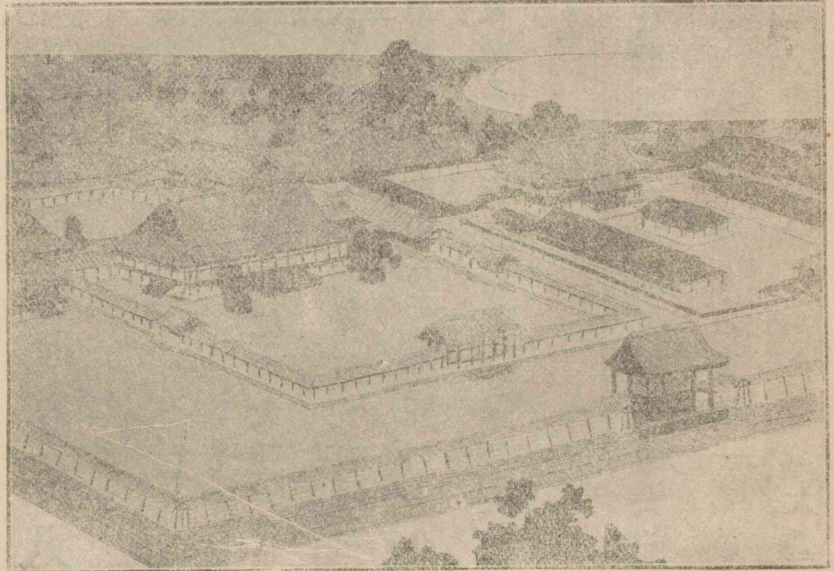


訂四 女子國語讀本卷八

一 御即位の大禮

大正四年十一月十日、允文允武なる今上陛下には、明治天皇の掟てさせ給ひし登極の大令に基づかせられて、嚴かなる大典を平安の舊都に擧げ、天つ日嗣の高御座に上らせ給ひき。

抑、御即位の御儀には、賢所大前の儀と紫宸殿の儀とあり。賢所大前の儀とは、萬世一系の大統を繼がせ給ひし由を皇祖の神靈に告げさせ給ふ大儀にして、本に報い始に反る大



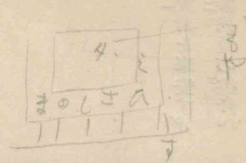
殿涼清 殿宸紫 門明承 殿興春 門華月 門華日 門禮建

孝を申へさせ給ふ御儀
なり。紫宸殿の儀とは、
内萬民に知らせ、外列國
に宣へさせ給ひ、併せて
内外の奉祝を受けさせ
給ふ盛儀なり。此の日、
午前に賢所大前の儀、午
後に紫宸殿の儀をば行
はせ給ひぬ。
さても、この生日の足日
のめでたさ。夜來の雨

は名残なく霽れて、曉氣殊に爽かに、東山三十六峰も君が御
榮をほぎがほなり。掃清められたる大路・小路には、早くも
往き來の人足繁く、其の間を縫ひて、參列員の馬車・自動車・人
力車、東西南北より絡繹として、御苑に向ふ。内裏の門外に
は儀仗の兵幾萬堵列して非常を警め、門内の大庭には白妙
の眞砂を敷きつめて塵一つを留めず。午前八時といふに、
參進の合圖の振鈴、清々しき秋の朝の空に澄みわたれば、參
列の人々肅然として春興殿の正門に入り、左右の幄舎に着
床す。殿の大庭には鉦鼓など立列ね、威儀の人列を正して
床に就けり。
折しも起る樂の音に耳をすませば、今し笙・篳篥の調べす

(一) 賢所を奉安す。
(二) 參列員の控所。
(三) 式の合圖をする爲のもの。

神事を司る官。



すべて外部に面せる間を廂といふ。

しく神代ながらの神樂歌をぞ奏づるなる。掌典恭しく殿の階を上りて御扉を啓き奉り、神饌幣物を捧げ、掌典長畏みて祝詞を奏し奉る。殿上神威いよゝいやちこに、莊嚴の氣場に滿つ。午前十時、庭上鉦鳴りて、諸員起立し、最敬禮をなせる裡に、陛下には宮々並に、近くかしづき奉れる人々を前後に隨へさせられて、出御あり。内陣なる御座に着かせ給ひ、宮々には南廂に侍座あらせらる。立櫻の御冠を戴かせ、白妙なる帛の御袍を召させ、御笏を端し給ふ御影の尊さ、神しき、仰ぎ拜せんも畏し。

庭中鉦鳴りて、諸員恭しく起つ。陛下には御親ら神前に進み給ひて御拜あり、次いで、御告文を奏せさせ給ふ。あゝ、此



御即位の禮女官服裝



御即位禮大使務事官服裝 (上以位四)

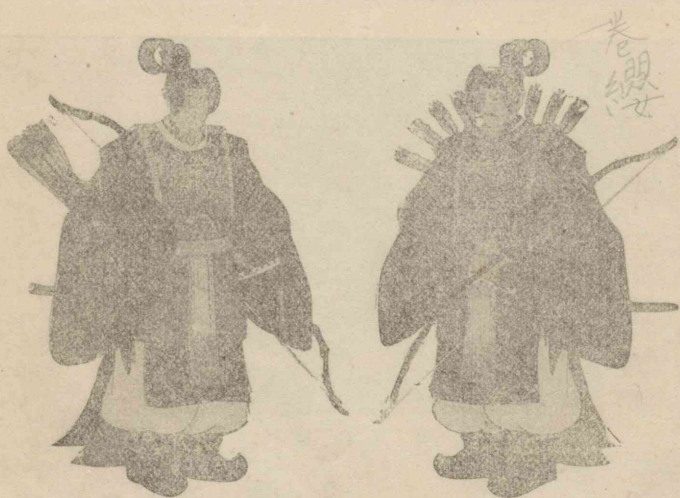
の時ぞ、天祖の神靈に對し給ひて、崇敬追慕の宸慮を舒へさせられ、御國の爲に神佑を祈らせ給ふは。あはれ、天壤無窮の神勅を下して國を肇め統を垂れ給ひて三千年、いや繼ぎく、に榮えまして、今此の大御代の盛儀を擧げさせ給ふを見そなはずらん大御神の大御心や、そもいかに。玉音朗々として上天に聞え

させたまへば、神鈴則ち神慮をすゞしめ奉りて、陛下御座に復らせ給ふ。次で、宮々の御拜ありて、陛下には供奉の人人を随へて入御あらせ給ふ。諸員奉拜の禮あり。嚙曉たる神樂の歌再び起り、神饌幣物を撤下して、御扉を閉ぢ奉る。時に十一時三十分なりき。

土廊
南面の軒、常は「紫宸殿」の御額のかゝれる處。
五旒各々色を異にする。

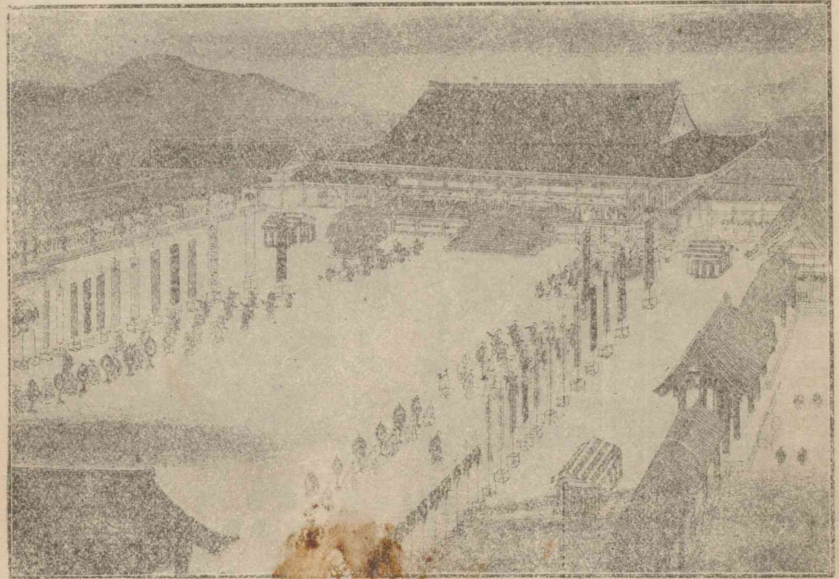
午後一時四十分、振鈴の音あり。建春門を入り、紫宸殿の南庭の左右なる軒廊の御簾内に參進す。見上ぐれば、紫宸の大殿はいと嚴かに秋天に聳え、南榮には、九十尺の日像の帽額に七色の瑞雲ぞたなびきたる。殿前の大庭には、左近の櫻より南へ、日像纛旒一旒、頭八咫鳥大錦旒一旒、菊花章中錦旒五旒、同小錦旒五旒、梓十竿、右近の橘より南へ、月像纛旒一

二十人
太刀・弓・胡蝶・梓
四十人



御即位威儀本位の装束 (官任勅) (官任奏)

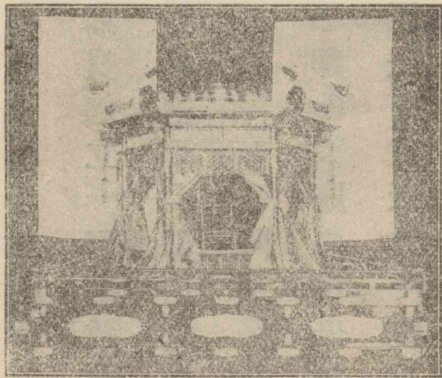
旒靈鷲大錦旒一旒、菊花章中錦旒五旒、同小錦旒五旒、梓十竿一列に立並び、萬歳旒は大錦旒の前に左右一旒相對して立ちたり。萬歳旒の彼方には威儀の人々、此方には威儀物奉持の人々、鉦鼓の人々等相對して着床せり。纛旒錦旒の色々折からの日影に輝きて、誠に目もさむるばかりなり。殿上は遙けく奥深くして定かには拜せられねど、御帳垂れたる高御座、御帳臺



御即位の座の圖

の金碧燦爛たるは紛ふ方なくぞ仰がれたる。かくて、内閣總理大臣、宮内大臣、式部長官、外國使節等、それ殿上定の席に就く。次で、宮々の參進御列立あり。庭前のさま、殿上のさま、げに此の世にして此の世ならぬめでたき尊さ。生れて此の昭代に遇ひ、此

の盛儀を拜し奉る。何等の幸福ぞ、何等の光榮ぞ。やがて、官人の嚴かなる警蹕の聲、肅として音なき殿上、庭中に徹しぬ。陛下には今し筵道を渡



高御座の圖

御あらせられて、高御座にや出御あらせ給ふらん。御帳尙深く閉せど、殿上神威自ら深うぞ覺ゆる。侍從、御劍、御璽を御帳内なる案の上に奉安して退けば、更に侍從御笏をば陛

下に上る。あゝ、尊き日の尊き時は今やいよく近づきぬ。内外の臣僚、今將に龍顏を拜し奉らんとし、嚴肅の氣式場に滿つ。侍從東西の兩階を上りて、高御座正面の御帳を褰

げ奉る。玉座のほとり光明赫奕として、陛下今し聖體をここにあらはし給ふ。いたゞかせ給ふは立纓の御冠、召させ給ふは桐竹鳳凰麒麟をあやなせる黄櫨染の御袍とかや。御笏を執らせ給ひて立御あらせらる。南庭に鉦一打して、諸員起立、一同最敬禮をなす。

内閣總理大臣伯爵大隈重信則ち西階を下り、西側なる軒廊と檐梓との間を過ぎて承明門内掖に到り、北面して高御座を拜し、大庭の中央を南階の下に進む。日本帝國七千萬の臣民を代表して優詔を拜せんとするなり。鉦一打して諸員最敬禮を行ふ。陛下には侍臣の上る勅語を御手に取らせて、玉音朗らかに大統を享け即位の禮を擧げさせ給ふ御

旨を宣へさせ給ふ。總理大臣鞠躬如として進み、南階十八級の中央を昇りて、南榮大帽額の下に立ちて、壽詞を奏し奉る。父なす君が慈仁の大御心は下萬民に治り、子なす民が至誠の眞情は上天聽に達しぬ。藹々たる君臣和樂の兆象の、我が國をおきてはまた有るまじくおぼえて、感激の情轉切なり。

壽詞終りて、總理大臣は階を下りて萬歲檐の前に至り、姿を端して殿上を仰げり。時正に午後三時三十分。總理大臣則ち聲高らかに萬歲を唱ふ。參列せる總員、之に和す。斯くする事三たび。其の聲天に轟き、地を撼かす。時に、洛中洛外の寺々の鐘、軍隊の號砲、殷々として起り、萬歲を呼ぶ聲

聲は、宛ら萬雷の落つるが如し。あゝ、此の時ぞ、大和くぬちの津々浦々はいふも更なり、普天の下、率土の濱、王臣たらん者の擧りて萬歳の聲に山を揺り海を動かしたるは。かくて、總理大臣定位に復すれば、陛下には龍顏殊にうるはしく入御あらせ給ふ。諸員最敬禮して奉送し、次で、順次退出せり。仰げば、日光隈なく輝きて空に片雲なく、俯すれば、草木すくよかに伸びて地に纖塵なし。八衢に寄集ふ幾萬の青人草いづれも嬉々の色を浮へて、我が大君の萬歳を祝ぎ、寶祚の無疆を祈らざるはなし。

二 憲法抄文

大日本帝國憲法

第一章 天皇

第一條 大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

第二條 皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫之ヲ

繼承ス

第三條 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

第四條 天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此ノ憲法

ノ條規ニ依リ之ヲ行フ

第十一條 天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス

第十三條 天皇ハ戰ヲ宣シ和ヲ講シ及諸般ノ條約ヲ締結

ス

第二章 臣民權利義務

第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ兵役ノ義務ヲ有ス

第二十一條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ納税ノ義務ヲ有ス

第二十二條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ居住及移轉ノ自由ヲ有ス

第二十三條 日本臣民ハ法律ニ依ルニ非スシテ逮捕監禁審問處罰ヲ受クルコトナシ

第二十五條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外其ノ許諾ナクシテ住所ニ侵入セラレ及搜索セララルコト

ナシ

第二十六條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外信書ノ祕密ヲ侵サルルコトナシ

第二十七條 日本臣民ハ其ノ所有權ヲ侵サルルコトナシ公益ノ爲必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

第二十八條 日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス

第三章 帝國議會

第三十三條 帝國議會ハ貴族院衆議院ノ兩院ヲ以テ成立ス

第三十四條 貴族院ハ貴族院令ノ定ムル所ニ依リ皇族華

族及勅任セラレタル議員ヲ以テ組織ス
 第三十五條 衆議院ハ選舉法ノ定ムル所ニ依リ公選セラ
 レタル議員ヲ以テ組織ス
 第三十七條 凡テ法律ハ帝國議會ノ協賛ヲ經ルヲ要ス

三 暴風雨 鹽 井 雨 江

雲のゆきゝなへてならずものさわがしく、吹き來る風のを
 りふし雨などうちまじりて、日一日、いとおぼつかなく暮し
 し夕つ方より、空のけしきはげしく荒れて、飛ぶが如き雲は
 狂へる駒の羈を放れ、傷ける虎のあらびにあらぶるが如く、
 恐ろしさいはんかたなく、雨は横さまにつぶてを打つばか

*名は正男、奈良女
 子高等師範學校教
 授、文學士、國文
 家、大正二年歿す。

和に

友として

り、風はおどろくしく鳴りさけびて、梢を折り垣をぬき、あ
 はれ、ありとある鬼神の聚り來つて天が下を一揉みに揉ま
 んとするかと疑はれ、ものすこきことものにもにず。いと
 すさまじくなれば、雨戸をかたく閉し、かゝる時こそ古の人
 をと思ひて、日來好める文を繕き、強ひて讀みもてゆけど、魂
 身に添はねば、何事も覺えず。

風はいよく、猛りたち、雨はますく、狂ひて、戸も微塵に成
 らんとすれば、家はゆらくとゆらきて、大海のはて、船の上
 に在る思ひす。風の響、雨の音募りに募れば、千丈もあらん
 大波の湧立ちて、今やうつまく波の底に沈みはてんとあや
 しまれ、稚き者は泣きまどひ、老いたる者は經誦じなです。

一子安の始
古今佳本

われも心弱くてはと思へば、恐れをのゝく女子どもに、など
さは心弱き。小町はあらずや。いみじき歌よまずやなど
いへど、手足はわなゝきて見ゆ。
雨戸ほそめにうちあけ見れば、ぬば玉のやみにて、あやめも
わかず。唯、空鳴りとゞろきて、何處とも無く人ののゝしる
聲は、奈落の底、地獄のはてより來るかと思はれて、ものもお
ぼえず。百萬の大軍ひたよせに寄せ來りて、蹄を合せて小
やかなる庵を驅散さんとするかと思はれて、幾度か身も慄
はれ、百雷の一度に落ちんばかりの音して、天も裂け地も頽
れんかと思へば、今ははや限りぞとあまたゝび思ひ絶えな
どして、夜一夜安き心地もせず。曉近くなるまゝに、吹く風

*女子教育家、實踐
女學校長

も人の心も互に弱りゆきて、稚き者も枕につきなす。わ
れもいねんとすれど、夢路おたやかならず。
聽て、めざむれば、軒端を叩きし雨も音なく、さばかり強かり
し風も名残なく、空しづまりて、何處にかよへの嵐は吹きた
りけんと思はるゝも、をかし。梢は大方ふき折られ、木の葉
は所せくおちつもあり、門も倒れ、築土もくづれ、野邊も庭も一
つになり、野寺の軒あらは見ゆるも、あはれなるに、松の木
の大きな根より吹倒され、柳のみたよゝとして残り
たるは、風にいかなる心のありけん、きかまほし。(雨江全集)

四 國許なる姉に答ふ
下田歌子

御手紙有りがたく拜見いたし候。怪しき雲のゆきかひに、時雨うちそゞぎて、雪さへ交る昨日今日の寒さ、御地も同じさまに承り候を、御兩親様御始め、皆々様御そろひ、いよく御壯健にわたらせられ候趣、仰せ聞ければ、嬉しさ此の上なく存上候。私事お蔭さまにて、風一つ引かぬほどの健康にて候まゝ、何とぞ御安心下されたく候。いつも姉上様の御情ふかき御さとし、身に染々と有りがたく存上候。殊には御封じこみの梅の花こそ、私の身にとりて千萬言の教訓よりも有難く、數ならぬ身ながらも、皆々様の御力ぞへにて、兎も角もこれまでは無事に参り、來春は愈、卒業期と相成申候。

若し幸に及第いたし候とも、もとより愚なる私に候へば、故郷に飾るべき錦の袖はたつべくもおもはれず候へども、今よりは力の限り勉強致候うて、見苦しからぬさまに卒業致したく、一心に勉め居候。仰の通り寒さの折柄、いかに行届きたる寄宿舎なりとて、家に在る程の自由は叶ひ申さず候まゝ、初のほどは寒きにつけ暑きにつけ辛しと感ひ候ひしこともこれあり候ひしが、慣れてはさほどにも覺え申さず。且は又、御兩親様姉上様の御教訓を身にしめて、身をも心をも金鐵にいたすべく候間、かへすも御心配下さるまじく候。手藝科の練習にとて、いとまくに編出で候腕はめ、母

上様には色合少し華やかに過ぎ申すべしと存候まゝ、
 誠に不出來ながら、姉上様まで御覽に入れたく、なほ、母
 上様の分は後便に差出申すべく候。
 くれぐれも、私こと身體はますく、健かに相成候故、こ
 れのみは聊かも御案じ下さるまじく、なほ、御兩親様へ
 よくく、仰せ上げられたく、御願ひ申上候。何くれの
 事、姉上様のみ御忙しくわたらせられ候はんと、年の積
 るにつけてやうく、思ひ知り、恐れ入候。歸郷の後
 一倍の御孝養、御手傳も申上げたしと念じ居候。まづ
 は御禮かたぐ、御返事まで。かしこ。(三體女子消息文)

詩人、小説家。

五 旅のこゝろ

島崎藤村

響りんく、音りんく、
 うちふりうちふる鈴高く、
 馬は蹄をふみしめて、
 故郷の山を出づるとき、
 そのかぐろなる鬣は、
 涼しき風の吹亂り、
 その紫の雙の眼は、
 青雲遠く望むかな。
 枝の緑に袖觸れつ、
 あやしき鞍に跨りて、

馬上にうたふ一ふしは、
げにや、遊子の旅の情。
あゝ、をさなくて國を出で、
東の磯へ、西の濱、
さても、繫がぬ舟のごと、
夢長きこと二十年。
たま／＼ことし歸り來て、
昔懐へば、ふるさとや、
陰を岡邊に尋ぬれば、
松柏すでに折れ摧け、

徑を川へにもとむれば、
野草は深く荒れにけり。
菊は心をおどろかし、
蘭は思をいたましむ。
高きにのぼり、草を藉き、
惆悵として眺むれば、
檜原に迷ふ雲落ちて、
涙流れて、かぎりなし。
去ね、いね。かゝるふるさとは

ふたゝびいふにたらずかし。
 あゝよしさらばけふよりは
 日行き風吹き彩雲の
 あやにたなびくかなたをも、
 白波高く八百潮の
 湧立ちさわぐかなたをも、
 かしこの岡もこの山も、
 いづれ心の宿とせば、
 しげれる谷の野葡萄に
 秋のみのりはとるがまゝ、
 深き林のもみぢ葉に

天淵秋の光は履むがまゝ。

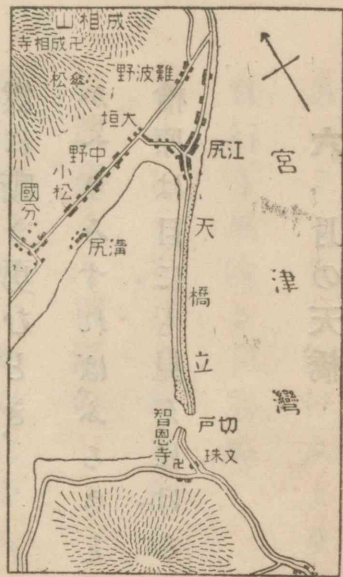
秋の響りんく、音りんく、
 うちふりうちふる鈴高く、
 馬はかうへをめぐらして、
 雲に嘶き勇むとき、
 かへりみすれば、ふるさとの
 檜原は目にも見えにけるかな。(落梅集)

六 月の天橋

徳富健次郎

軋と櫓が響いて、舟は墨染の濃い松陰から、白々とした月下

の海に出た。海と云うても、浅い洲の上の水である。何と



云ふ好い月夜か。雲一つ
無い空にのみ照るかと思
へば、水中に天あつて、其處
にも月は璧の如くに光つ
て居る。何と云ふ清い水

だらう。月明りにも水底の砂が分明に數へられる。我ら
は今天河を渡りつゝあるのではあるまいか。船頭よ、緩か
に舟をやつてくれ。もつと徐かにやつてくれ。併し、如何
程徐かに舟をやつても、彼岸は近い。するくくと舟はもう
天橋の渚に着いて了うた。

*大正二年十一月十
二日。

舟から上つて踏む白砂は、もう天橋立である。此處らは植
ゑついで間もないと見えて、松は稚木で、疎である。月光に
雪と輝く砂を踏んで、漸々奥へ入つて往く。十一月も中旬
と云ふに、蟲の音がする。歩むにつれて、松影は段々深くな
り、果ては、月光より松の影が多くなつた。
何と云ふ明るい月だらう。仰げば、松の一葉々々が白金の
ピンを數ふる如く讀まれ、俯く砂には、又、一葉々々の影が黒
く鮮かに讀み得られる。

松間の路の曲る處に來た。余は松の幹に倚つて立ち、妻は
砂に蹲踞んだ。余は黙し、妻も黙す。寂然した天橋立に人
籟絶えて、唯何處からともなくざあぐといふ響がする。

松風か。否、足下の松影は濃い墨もて描いた様に少しも動かぬ。音響は與謝の海が天橋一里の白砂を舐むる響に外ならぬ。其の響に牽かれて、汀に出て見る。其處に二間ばかりの花崗石のベンチがある。並んで腰を掛ける。月下に仄白く眠る與謝の海、其の懷には璧の様な月を抱き、寢息かとばかりざぶり、又、ざぶりと、白砂にこぼるゝ漣は、まるで眞珠をこぼすやう。海の南に半圓形に山根に沿うて紅寶石や琥珀の光が點々と灣を縁取つて居るのは、彼は宮津の町である。ふと此方の海の上に不思議なものが現れた。晃々とした明珠の幾段にも列んだ、老大な、横長い物である。龍宮城の出現——と見る間に、それは宮津の方へと動いて

行く。やゝ暫く其の行方を見送る。龍宮城は彼の宮津灣頭百千の龍燈晃めく邊にびたりと附いて了うた。龍宮城が移動すると見たは、それは今日の最終の連絡船が宮津を指して行つたのであつた。あとは唯、熨した様な與謝の海、照りまさる月の空と靜かに相抱きて、一里の松原枝も鳴さぬ天橋立の長い汀に傍うてざぶり、又、ざぶりと、漣のさゝめくばかりである。

松原に戻つて、又、奥へくと砂路を歩む。さくくと砂を踏む二人の足音の絶間に、波のさゝめきが慕うて來る。幽かに蟲の音がする。松影は益、深くなつて、果ては、砂の上に零るゝ月影がちらちらと螢ほどに細かく、疎になつた。と

見ると、こゝに寂然と鎮まります社がある。大方橋立明神と云ふのであらう。松影を浴びた其の宮には、人影もない、人聲もない、燈明一つ點つて居ない。

二人は其處の松に倚りかゝつて、黙つて、良久しく立つた。肉に居る我らは、月の天橋からさへも歩を返さねばならぬ。二人は松影から月に出て、砂路をぶらりくと、切戸の渡に來た。切戸の水は全く天河の如く美しい。みぎはに立つて向ふを見れば、眞黒い彼岸に唯一つ赤い灯が見える。殊の渡守の小舎の灯である。

「お——おい」

二人は月の天橋の端に立つて暫く其の灯を眺めて居た。

(死の蔭に)

山城國宇治郡山科村。

元吉田兼好といふ。後醍醐天皇の頃出家す。當時屈指の歌人。

七 栗栖野

兼好法師

神無月の頃、栗栖野といふ處を過ぎて或山里に尋ね入ることありしに、はるかなる苔の細路を踏みわけて心細く住みなしたる庵あり。木葉に埋るゝ笥の雫ならではつゆおとなふものなし。闕伽棚に菊紅葉など折りちらしたる、さがに住む人のあればなるべし。「かくてもあられるよ。」とあはれに見る程に、かなたの庭に大きな柑子の樹の枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、少し事さめて、此の樹なからましかばと覚えしか。(徒然草)

山城國葛野花園
村御室。
石清水八幡宮、男
山八幡宮ともいへ
り。
右の八幡宮の末社

八 石清水

兼好法師

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心
うく覺えて、ある時思ひ立ちて、たゞひとり徒步よりまうで
けり。極樂寺・高良などを拜みて、かばかりと心得て、歸りに
けり。さて、傍の人に逢ひて、年ごろ思ひつること、はたし侍
りぬ。きよしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも、参り
たる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん。ゆかしかり
しかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。とぞ
いひける。
少しの事にも先達はあらまほしきことなり。(徒然草)

九 鳴子

揉みに揉んで夜嵐わたる鳴子かな
笠とれて面目もなき案山子かな
猪もともに吹かるゝ野分かな
枯枝に鳥のとまりけり秋の暮
枯葦の日にく折れて流れけり
易水にねぶか流るゝ寒さかな
我が寝たを首あげて見る寒さかな

肥後の國學者。文
久四年没す。
同
壯士一去不復還

一〇 夜學

中島廣足

寺々のそやの鐘の響も收まりて皆人もねたるに、いと嬉しう、燈火明くしなして、文机に打向ひたる、いみじう心すみて、晝見たりしあたりの、何心なくて過ぎにしも、思ひ知られて、深き心ばへある條々も、自ら解きえらるかし。かゝげつくしても、なほねぶたさも知らず、油さしそへつゝ、見もて行くに、遠き世の人もさしむかひかたらふこゝちす。册子作りて、をかしき節々あるはふと思ひ得たる事などをば、墨おし磨りつゝ、書きつけなどするも、をかし。鳥の聲は夜深きにやと思ふに、いと疾く明けはなれたり。しばしとてうちねぶる夢のうちも、あだしことならんやは。(檀園文集)

二 夜討會我

其名も高き富士の嶺の。御狩にいざや出でうよ。
ツレ四人次第
シテこれは曾我の十郎祐成にて候。さてもわが君東八ヶ國の諸侍を集め、富士の卷狩をさせられ候間、われら兄弟も人なみに罷り出で、唯今富士の裾野へと急ぎ候。四人サシ、けふ出でていつ歸るべき故郷と、思へば猶もいとゞしく。上歌名残を十郎詞残す我が宿の。垣ねの雪は卯の花の、咲散る花の名残ぞと、我が足柄や遠かりし、富士の裾野に著きにけり。急ぎ候程に、これははや富士の裾野にて候。いかに時致、然るべき所に幕を御打たせ候へ。五郎詞畏つて候。いかに時致、今に始めぬ御事なれども、我が君の御威光のめでたさは候。

本文の句讀は凡て論本の句讀に従ひ、送假名も多く論本に従ひ、傍訓は觀世流にて嚴重に教ふる所に從へり。
 シテ、能にて一番に主なる役を勤むる者、此處にては曾我五郎時致。
 ツレ、シテに次で主なる役を勤むる者、此處にては十郎祐成及び鬼王と圓三郎との兩人。
 次第、諸ひ方の名稱。
 詞、相手に話す様なる諸ひ方をする諸ひ方の名稱。
 サシ、諸ひ方の名稱。
 上歌、諸ひ方の名稱。
 源頼朝。
 關東八州。

夜討當我
 其名も高き富士の根のく
 十郎祐成まの扱も我若東
 國を諸侍言ふ富よりまの扱
 をあざむけ同我ら兄弟も人あま
 しまりの心と富よりまの扱と
 鳥の討しおかしに海をまの扱
 と思へばいと敷なるを御
 物寅のく道徳をうの花の
 片を我らの名はうと御
 やさかり富よりまの扱
 まりく
 乃まう野あそびや時察然へ

うち並べたる幕の内目を
 驚かしたるありさまにて
 候。かほどに多き人の中に
 われら兄弟が幕の内程物
 さびたるは候まじ。五郎詞「さ
 ん候今に始めぬ君の御威
 光にて候。さてかのあらま
 しは候。十郎詞「あらましとは
 何事にて候ぞ。五郎詞「あら御
 情なや。われらは片時も忘
 るゝ事はなく候。彼の祐經

が事候よ。十郎詞「げにくゝ某も忘るゝ事はなく候。さていつを
 いつまでながらへ候べきともかくも然るべきやうに御定
 め候へ。五郎詞「御説の如く。いつをいつとか定め候べき。今夜夜
 討がけにかの者を討たうずるにて候。十郎詞「それが然るべう
 候。さらばそれに御定め候へや。思ひ出だしたる事の候。われ
 ら故郷を出でし時。母にかくとも申さず候程に。御歎きある
 べき事。これのみ心にかゝり候間。鬼王か團三郎か。兄弟に一
 人形見の物を持たせ。故郷へ返さうずるにて候。五郎詞「げにこ
 れは尤にて候さりながら。一人歸れと申し候はゞ。定めてと
 かく申し候へし。唯二人ともに御返しあれかしと存じ候。十郎
 尤にて候。さらば二人ともに此方へ參れと御申し候へ。五郎詞

此處にて、十郎五郎より團三郎鬼王に、祐經を討つべきに、より見物等母へ、是より曾我へ歸れ、と命ず。團三郎兄弟も敵討に眞先かたて討死せん爲なれば命に背けども歸らずといふ。十郎五郎如何にいと命に從はぬかと威嚇す。團三郎兄弟承服し得ず。表に承服し、不本意なり。歸らざれば命に背く。進退に窮まつて、死にんとす。既に刺さへんとす。長き故に、此處に略したり。

同、同吟といひて、地の人々の一齊に、諸ふこと。地とて、右側は舞臺の向つて、人並びゐる。又は八人の稱。論ひ方の名稱。

「畏つて候。いかに團三郎鬼王此方へ參り候へ。」ダン「畏つて候。五郎詞」あゝ暫く。是は何としたる事を仕り候ぞ。十郎詞「やあ兄弟の者返すまじきぞく。まづノ心静めて聞き候へ。今夜此所にて祐經を討ち。われら兄弟空しくならば。さて故郷にまします母には誰かかくと申すべきぞ。敬ふ者に從ふは。君臣の禮と申すなり。これを聞かずは生々世々。永き世までの勘當と、上歌かきくどき宣へば。鬼王團三郎さらば形見を賜はらんと云ふ聲の下よりも。不覺の涙せきあへず。

地「それ人の形見を贈りしためしには。彼唐土の樊噲が。母の衣を著替へしは。永き世までのためしかや。」十郎サシ「今當代の弓取の母衣とはこれを名づけたり。然ればわれらが卑

クセ、語を構成せる部分の名稱。

しき身を。譬ふべきにはあらねども。恩愛の契の。あはれさは。われらをへだてぬ。習ひなり。クセ「さる程に兄弟文こまぐ」と書きをさめ。これは祐成が。今はの時にかく文の文字消えて薄くとも。形見に御覽候へ。皆人の形見には。手跡に勝るもの有らじ。水莖の跡をば心にかけてとひ給へ。老少不定と聞く時は若き命も頼まれず老いたるも残る世の習。飛花落葉の理と思し召されよ。其時時致も。肌のみもりを取出だし。これは時致が。形見に御覽候へ。形見は人のなき跡の。思ひの種と申せども。せめて慰む習ひなれば。時致は母上に添ひ申したると思召せ。今までは其主を守り佛の觀世音。此世の縁なくと來世をば助け給へや。」十郎「既に此日も入相の。鐘もは

能の前半終りて、後半に移りて、ここに出来来るシテ、ツレを後シテ、後ツレといふ。一聲、諺ひ方の名稱。

や聲々に諸行無常と告げ渡る。さらばよ急げ急げ使涙を文に卷き籠めて其まゝやる。文の干ぬ間にと詠ぜし人の心まで。今更思ひ白雲のかゝるや富士の裾野より曾我に歸れば兄弟すごくと跡を見送りて泣きて留まる。哀れさよくと。
後ツレ一聲同 寄せかけて打つ白浪の音高く関を作つて騒ぎけり。
後シテ あら夥しの軍兵やな。詞われら兄弟討たんとて多くの勢は騒ぎあひて。こゝを先途と見えたるぞや。十郎殿く。何とて御返事は無きぞ十郎殿。脊に新田の四郎と戦ひ給ひしが。さてははや討たれ給ひたるよな。口惜しや。死なば骸を一處とこそ思ひしに。物思ふ春の花盛散りく。になつてこゝかしこに骸をさらさん無念やな。上歌同 身方の勢はこれを見

(一) 漢高祖の家來、勇將。
(二) 高漢祖の家來、智謀の將。

てく打物の鏢もとくつろげ時致を目かけてかゝりけり。シテ あらものくしやおのれらよ。同 あらものくしやおのれらよ。さきに手並は知るらんものをと太刀取り直し立つたる氣色譽めぬ人こそなかりけれ。かゝりける所に。御内方の古屋五郎。樊噲が怒をなし張良が秘術をつくしつゝ。五郎が面に斬つてかゝる。時致も古屋五郎が抜いたる太刀の鏢を削り。暫しが程は戦ひしが。何とか斬りけん古屋五郎は二つになつてぞ見えたりける。かゝりける所に。御所の五郎丸御前に入れたてかなはじものをと肌には鎧の袖を解き。草摺かるげに。ざつくと投げ掛け上には薄衣引被き。唐戸のわきにぞ待ちかけた。シテ 今は時致も運槻弓の。

「あはれなれ」とあらまほしきところなり。

鎌倉時代の入橋成季の著といふ。
阿部貞任弟宗任

同今は時致も運槻弓の力も落ちて眞マコトの女メぞと油斷して通るをやりすごしおし並へむんずと組めば、シテおのれは何者ぞ。
五郎丸同あら物々しとわたがみ摺んで
えいや〜と組みころんで時致上になりける所を下より
えいやと又押し返し其時大勢オホセおり重なつて千筋チマの繩をか
けまくも忝カマシクなくも君の御前ミマエに追つ立て行くこそめでた
れ。

(觀世流謠本)

二三 武將の連歌

(一)

古今著聞集

伊豫守源頼義朝臣貞任宗任等を攻むる間陸奥に十二年の

陸中リクチュウ國膽澤郡に在りき。
陸中リクチュウ國磐井郡に在りき。

お植

春秋を送りけり。鎮守府を立ちて秋田の城に移りけるに、
雪降りて軍のをのこどもの鎧皆白妙になりけり。衣川ウヱカハ
の館岸高く川ありければ楯を戴きて冑ウヅに重ね、筏を組み
て攻戦ふに、貞任等堪へずして、遂に城の後より遁れ落ちに
けるを、一男八幡太郎義家衣川に追立て、攻伏せて、きたなくも
うしろを見するものかな。しばし引返せ、物言はん。」と言は
れたりければ、貞任見返りたりけるに、
衣のたてはほころびにけり。
と言へりけり。貞任くつばみをやすらへ、しころを振向け
て、
年をへし絲のみだれのくるしさに。

と附けたりけり。その時、義家はげたる矢をさしはづして、
歸りにけり。さばかりの戦の中に、やさしかりける事かな。

(二)

十訓抄

高倉の院の御時、御殿の上に鶉の啼きけるを、悪しきことな
りとして、いかゞすべきといふことにてありけるを、ある人頼
政に射させらるべき由申しければ、さりなんとて、召されて、
参りにけり。この由を仰せらるゝに、畏まりて宣旨を承り
て、心中に思ひけるは、晝だに小さき鳥なれば得難きを、五月
の空闊深く、雨さへ降りて、言ふばかりなし。われすでに弓
矢の冥加盡きにけりと思ひて、八幡大菩薩を念じ奉りて、聲
を尋ねて矢を放つ。應ふるやうに覺えければ、寄りて見る

*源三位頼政

(一) 藤原實定

に、あやまたず中りにけり。天氣より始めて、人々の感歎い
ふばかりなし。後徳大寺の左大臣、その時、祿をかけられけ
るに、かくなん。

杜鵑名をも雲ゐに揚ぐるかな。

頼政取敢へず、

弓張月のいるにまかせて。

と附けたりける、いみじかりけり。まかり出で、後に、昔養

由雲外射雁、今頼政雨中得鶉、とぞ感ぜられける。

一三 文を作ること

幸田成行

文を作るは難きことなし。心のまゝに文を連ぬれば、文は

(二) 支那の楚の人、弓
の名手。

(三) 露伴と號す。著述
家、文學博士。

自らにして成るものなればなり。想を述べ、事を敘すると
いふ二いろの外に、文といふものはなし。想を述ぶる文は、
吾が心に想だにあらば、それをそのままに書きつらねて、文
そこに成るわけなり。想なくて想を述ぶる文を成さんと
せんには、それは火の無きに煙をあげんとするが如くなれ
ば、誠に難くもあるべし。想だにあらば、それを書現さんに、
難かるべきいはれなし。事を敘する文も、亦然り。敘すべ
き事、我が心の上に明かならんには、それをそのままに寫し出
す時、文直ちにそこに成るべきなり。難かるべき謂れ更に
あるべからず。若し、敘すべき事なきに事を敘する文を作
らんとせば、それは空しき鍋より何物かを出して皿に盛ら

んとするが如くなれば、實に難くもあるべし。敘すべき事
だにあらば、それを書現さんに、難かるべきいはれなからん。
述べんとする想、敘せんとする事あらば、唯心のまゝに書現
すべし。文は自らにしてそこに成るべきなり。
述べんとする想、敘せんとする事は、千萬石の水ほどもあれ
ど、筆の先には露ばかりも迸り出でず、誠に文は能くし難し
といふ人あり。その人、誠にしか思ひて、しかいふにもあら
ん。されど、それは事實にはあらず。誠に千萬石の水あらば、
それを湛へて、迸り出でざらしめんことこそ難かるべけれ
思ふに、その胸中に充滿ちたらんものは、誠は水にはあらで
未だ水とならざる前の雲の如きものの、氤氳としてたなび

けるなるべし。もし、誠に千萬石の水の湛ひたらんには、蟻の穴より隄も破るゝ道理なれば、その水の迸り出でんこと正に疑あるべからず。

古より文筆の人ならぬ人々の文章に、神采奕々、風趣津々、人をして或は襟を正し、或は涙を落し、或は奮ひ、或は悦び、或は深省を發し、或は手の舞ひ足の蹈むを覺えざらしむるもの多し。それらこそ眞に胸中の千萬石の水の、自らにして筆端に迸り、楮表に溢れたるものなりけれ。愛國の忠臣・思親の孝子・身を忘れて道の爲にせる哲人などの文章は、皆それなり。惻々として人を動かす文は、區々たる使字の巧、用語の麗なるより來らずと人の言ふも、また、この間の消息を語

淨土宗の開祖、鎌倉時代初期の僧。
眞宗の開祖、鎌倉時代中期の僧。
法華宗の開祖、鎌倉中期の僧。
浄土宗の高僧、鎌倉中期の僧。
最。天台宗の開祖、平安朝初期の僧。
空海。眞言宗の開祖、平安朝初期の僧。

れるなり。法然親鸞の文、日蓮、向阿の文、又溯りて傳教、弘法の文、皆人を動かすものあるは、文の成る前に既に文の在るありて、而して、後に、文自ら成ればなり。今の人、動もすれば、吾が胸中に文ありて、しかも、筆下に文なしといふは、誠に僭越に近し。文を成さんとする時、誠に文と成るべきもの、心の中に乏しければこそ、文を作りわづらふなれ。若し述べんとする想、敍せんとする事のあるあらば、直ちにそのまゝに筆を走らせて、しかも、文自ら宜しからん。よくく省みて、あきらめ知るべし。

雲未だ凝らざる時、徒に空中に漂ふ。雨已に成りぬれば、などか地上に墜ちざらん。多くの人の述べたき想も、敍した

き事も無きにはあらねど、文の能くし難きを如何にせんと
 言ふは當らず。その人の想といへるもの、未だ想といふ可
 からず、その人の事といへるもの、未だ事といふに足らずし
 て、想も事も總て朦朧曖昧にして、宛も雲の空中に漂へるが
 如く、唯その心の上に、とりとめたる様もなく、明かなる色も
 なくて、迷ひたなびけるに過ぎざるより、これに形を與へ、姿
 を賦して、文といふものとするに臨みては、如何にとも扱ひ
 難く、捌き難き次第ならん。こゝの光景を能く考へ省みて、
 我が文を作りかぬる所以の源を悟り得ば、やがて、文を成す
 べき道の坦々として、砥の如く平かに、不思議も手づまも秘
 密もなきことを知るを得て、そこより一日々々に筆の自在

は増すべきなり。(改訂新撰國語讀本)

*歌學者、歌人、
文學博士。

一四 女子と歌

*佐々木信綱

み空に星の光なく、地上に花の色香なくば、いかにこの世は
 寂しからん。人に歌といふものなくば、いかに人の世は寂
 しからん。星の光をつめたしとは誰か言ふらん。花の色
 をはかなしとは誰か言ふらん。其の花のうるはしき姿に
 打ちむかふ一時ぞ、塵の世の塵の思も忘られて、人は神にぞ
 近づくなる。その遠き星の光にあくがるゝ時ぞ、人はこの
 現世のはかなき假初のものならぬ事をも知りえて、行末遠
 く思をぞ馳するなる。かくてぞ人は清められ、高めらるゝ

*江戸淺草に住めり
著述多し。

なる。まして、奇しく妙なる人の心の輝きては星よりも清く、咲きては花よりもうるはしき歌といふものばかり、尊きものはあらざらん。されば、近世の國學者橋守部*が人の心を樂器にたとへて、歌よまぬ人の心を、鳴らぬ琴・音せぬ笛の如しと言ひけん如く、まことに、星輝き花さく世に、それをうるはしと感じ、あはれと思ふ心もてる人にして、歌よまざらんばかり口をしきはあらざらん。

こはなべての人になたりていふ事にて、もとより男女を別ちていふべきにあらねども、これを我が國の歌といふものにつきて見るに、あるは國語の性質、あるはそのさゝやかなる詩形などの故にや、我が歌は優しく、細かき情をのぶるに

ふさはしければ、もとも女子に適したりとやいふべからん。されば、また歌學ぶことによりて、かりそめに見すぐし、雲のたゞすまひ、草木のさまなど、天地のさまの姿にも心とまるやうになり、悲しき、樂しき、くさくさの人の世の事わざにも心動きて、女子が本來のうるはしきさがを養ひうるよすがともなるなり。されば、歌よむことは、また、女の身に學ばではかなはぬわざといふべし。

さらば、歌は如何にして學ぶべきぞ。まづ、つとむべきは歌よむ心ばへを養ふにあり。歌よむ心ばへとは何ぞ。さきにのべし天地のあらゆることより、人の世のわざの何につけても、あだに見すぐさで、いたるところにふかきあはれた

へなる趣を心をこめて見とむる事なり。この心ばへこそ歌よむに最も必要なことならぬ。これだに養ひえたらんには、その言葉につらね句につゞりいづるわざに於ては、或は師につくも可書によるも可。自らおほくよみ試み、古今のすぐれたる歌をたえずよみ味ふに於ては、女子のおのづからの優しく細やかなる性は、これと共に養はれ、これと共にあらはれいでて、星の光の如く清く、花の色の如くうるはしき歌をよみいでんこと難からじ。

一五 女流文學

藤岡作太郎

我が國の女子には和歌に秀でたるもの、男子をして後に瞠

東京帝國大學文科
大學助教授、文學
博士、國文學家、明
治四十三年歿す。

天武天皇の妃。
天武天皇の皇子大
津皇子の妃。
大伴家持の妻。

若たらしめたるもの、上古以來その數頗る多し。萬葉集に見えたる巾幗者流にも、額田女王、石川郎女、坂上大郎女などあり。されど、その才媛淑女の彬々として輩出したるは、實に平安時代にして、この時代の文學は殆ど女流の獨占に歸し、男子は有るか無きかに、一隅にけおされたり。その此の如くになりしは、原づくところ一にして足らざるべしといへども、女御更衣が、各その威勢を張りて權力を争ひしも、亦その一主因たるべし。即ち、才學ある女子は擧つてその招に應じて後宮に集りしなり。集りては互に才を競ひ、男子もまたこれと唱和贈答せんことを求むれば、後宮はやがて文學の淵叢、女房は即ち文界の粹となれり。かくて、彩華爛

漫たる平安女流文學は生れ出でたるなり。

(一) 其所出詳かならず。

(二) 越前守大江雅致の女、和泉守橘道貞の妻。

(三) 式部丞藤原爲時の女、右衛門權佐藤原宣孝の妻。

(四) 肥後守清原元輔の女。

(五) 姓は在原、阿保親玉の第五子、行平の弟、權中納言。

平安時代の女流文學者の中にて、最も著れし者を擧ぐれば、和歌には小野小町、和泉式部などあり。散文には紫式部、清少納言などあり。小野小町は女性美の最もよく發揮したるものとして、常に業平と對せしめらる。業平は天成の詩人にして、心に感ずるまゝをいひて歌となれるもの、風のさそふまゝに水のやがて文をなすが如し。たゞそれ感情の走るにまかせて口の上せ、敢へて刻苦鍊磨をなさず。されば、いはゆる心餘りて、詞足らざるところあり。小町もまた業平の亞流にして、たゞ感情のまゝを詠出す。その詠の業平に比して更に濃艶優麗なるは、さすがに女性の作なれば

なるべし。

和泉式部も、また才色雙絶、多情多恨。ものに拘束せられず、怨みては咽び、笑ひては鳴り、綿々滾々として盡きざる概あるもの、實に、その性情の迸り出でしなり。その詩才の豊富にして、所作の多量なるは、小町の上に出づ。もしそれ和歌の眞の價値を以てすれば、この式部こそ、業平と並べて、平安歌人中の二星といふべけれ。

源氏物語の著者は、人も知る如く、紫式部なり。早く夫に後れて寡居せる時に、この大著を成遂げたるなり。性貞淑にして節操の譽高く、その徳行は、千載のもと、婦女の龜鑑とするに足るものある程なれば、その詞想も放縱浮薄なる當時

の人情・風俗を描寫しながら、何處ともなく氣品高く、同情に富み、またその筆致も逸氣奔放の風なく、順良謹慎にして、長所に矜らざる趣あり。

清少納言に至りては、その性情まさに紫式部と相反し、機敏にして才情溢れ、しばし人を驚かせり。その著枕草子は、多くは彼が遭遇したる事實の追憶、さらずば、時々折々の見聞感想にして、秩序もなく筆に任せて書連ねたるものなり。しかして、その筆を遣るや、奔放にして自由、些の澁滯を見ず、偽らず、飾らず、眞率に本來の面目を曝露し來りて、その驕慢なる虚榮心の隨處にほの見えたるもをかし。しかも、その觀察は緻密周到を極め、その言句は痛快警拔、寸鐵よく人を

一 是忠親王の曾孫、駿河守平兼盛の女、右衛門尉赤染時用大養女文章博士大江匡衡の妻。
二 伊勢祭主大中臣輔親の女。
三 後白河天皇の第二女、一たび賀茂神社の齋院となる。
四 後鳥羽天皇の宮女、右京大夫源師光の女。
五 権大納言藤原爲家の室。
六 中納言藤原雅孝の男。
七 刑部卿藤原重家の男。
八 土御門内大臣源通親の男。
九 中納言藤原光隆の男。
以上四人藤原爲家と共に古今和歌集の撰者。

殺すが如きものあり。

かくの如くにして、紫式部と清少納言とは、その相反せる性情と著作とによりて、平安時代の文學を飾れり。この他、赤染衛門・伊勢大輔らも、また、この時代にありて名を知られたる才媛なり。

降りて鎌倉時代に入りては、和歌に式子内親王・宮内卿あり。散文に阿佛尼あり。式子内親王は後白河天皇の皇女にして、當時和歌を以て著れし雅家・有家・通具・家隆等も及ばざるところありきといふ。されど、この時代を代表せる女流は阿佛尼なり。阿佛尼は藤原爲家の室なり。その著十六夜日記の文は、詞短くして意長く、平易にして高雅なり。その

地勢形勝を敘すること簡明なる間に、處々に旅情をのべ、怨恨の念を洩し、子を思ふ親の心を寫せるうちに、一種の趣味を含めり。

これより室町時代以後に至りては、女子はいたく卑められ、武人ひとり天下に跋扈する情態となれり。されば、また平安時代の如き才媛の輩出するを見ること能はず。たゞこの戦亂の世にありて、小野お通の博學にして文をよくし、二段草子を作れるは、めづらし。徳川氏天下を一統して文教を奨励するにいたりても、女流文學者にして遠く中古の盛に比すべき者あるを見ず。中につきて、加賀の千代の俳句に於ける、荒木田麗女の歴史に於ける、やゝ見るべきもの

^二家康に仕へ、秀忠の女千姫に従つて大阪城に入り、淀君の信任を得。

^三加賀の人、安永四年歿す。

^三伊勢の神官荒木田武遇の養女、慶徳三郎太夫の妻。

*水鏡・大鏡・増鏡

あり。千代女の「ほとゝぎす」としてあけにけり。「の句は、人のよく知るところなり。荒木田麗女の『月の行方』池の藻屑は三鏡の後を續ぎて慶長の頃に至るまでの歴史を述べたるもの。我が國の女流歴史家の著として、人の推奨するところなり。

我が國の女流文學は、かくの如くにして明治の聖代に入り。王政維新以後、我が女子教育は日に月に隆盛に赴き、また昔日の比に非ず。將來社會文化の進むにつれて、男子は研究・發明に心を潛め、生存競争に力を盡すべし。是に於てか、方今の女子たるものは、我が固有の文學を研鑽し、以て文學史上に光彩を添ふる覺悟なかるべからず。(國文學講話)

一六 月の桂

左の歌、初なるは菅原道真のかうぶりしける夜母のよめる歌、次なるは和泉式部の歌、次なるは伊勢の歌、次なるは紫式部の歌、次なるは式子内親王の御歌、次なるは宮内卿の歌、次なるは俊成女の歌なり。

道真の母

ひさしつゝの月影つらなるを
しつらむをさるゝあつらふ

えらるゝ若の下を朽ちもせむ
字がねねをさるゝかき

みろくもなき山里のさくら花
はらのらきんちをけり

世の中をわたりけり
とちみろくをさるゝ

山ゆりもなきも
かきねをさるゝ

けりてはさうふはらわぬを吹くはけり
こころをくもぬのあらみりぬまはく

霜枯いそらるももろをぞあめをら
しむるよとけりし林のなごり枝

女子の短冊に歌を認むるには、二行目の頭を初の
行より一字ほど下げ、裾をば初の行とそろへて認
め、且、己が名をば短冊の表面にあらはさぬが、古來
のしきたりなり。こゝには、その書式に従ひて認
めたるところを示したり。

一七 叔母に贈る

岩 倉 具 視

*明治創業の功臣、
明治十六年に薨す
贈太政大臣。

この程に存じがけなく途中 変事よ
きこみ 謙よりふづのこぼる次第よふ
幸より一命よかけり、やりのこぼ
決してはをたすくまゐるがずし、は安ん
ねるにまゐるせん御光體よかゝるは心
まゐるやと何とぞ深く恐入りまゐる
せん志よりながく固より一點の私心なく
只管國家の公為と存じよげぬおなご、
よびやしと天地に融づる可いなる又古今

珍しき大立草の御時節なればは趣意
 のわろぬ者も多うあはゞ、百斯梅の
 事あはれ致し方なきこと、承知も
 あはれし通り和漢洋共々國家の
 以爲る不慮の難く、さういふ例女
 たりぬこと、何事元我が大
 君の以爲るなりゆきと思召しあは
 らるや、いふや、あはれいふや、
 今ら一段快くお覚えの中、ゆきは心配

明治七年

お紙けの函りまが、一草やうがまゝ
 両三の中は物を信づく、まゝはあ神
 りすれし御侍ら、まゝは、目出なかと

一月十九日

具視

知先院様

おまゝの、様より格別の仕向を
 の外、おまゝの中、事ども少な
 かりぬこと、いふも、夜中執筆も心
 しまり、申す、進、男、女、いふも

東京市赤阪離宮舊正門前に在り。

よりふ吹聴甲よりくもるを
腰折の一段し入れまあるを

一月十四日夜倉速く新に

遭ふける時詠ふる

焼た刀のときつるがけの雲の上城

あみわらうともねれをるな

し浪のうらるあはれ跡ねる

いぢねのさうらうのざりけり

霜枯のその葛わづら一まどに

かゝ命は神やまのり

(今日の書面)

一八 叢 蘭

好事門を出でず、悪事千里を行く。大草

十目の視る所、十手の指す所、其れ嚴なるかな。大草

蒼蠅の飛ぶこと數歩に過ぎず、騏驎の尾に附くときは千里

の路に騰る。後漢書

狙公芋を賦る。曰く、朝には三つ、暮には四つと。衆狙みな

怒る。曰く、然らば、朝には四つ、暮には三つと。衆狙みな悦

ぶ。列子

天地は一物の爲に其の時を枉げず、日月は一物の爲に其の明を晦まさず、明王は一人の爲に其の法を枉げず。古文孝經 叢蘭茂らんと欲すれば秋の風之を敗る。王者明かならんと欲すれば讒人之を蔽ふ。帝紀

孔子

子曰く、知者は水を樂しみ、仁者は山を樂しむ。知者は動き、仁者は靜かなり。知者は樂しみ、仁者は壽し。論語

實業家、男爵

一九 人生の慰安

澁澤榮一

論語中の語

「常に心を淡然の域に恣にし、神を至誠の境に馳す。」とか、「疏食を飯ひ、水を飲み、肱を曲げて之を枕とす。樂亦其の中にあ

り。」とかいふやうに、専ら精神の方面に於て慰安を求めるところが出来れば、この上ない事である。けれども、これは常人には望み難い。常人には、或程度まで物質的の慰安が必要である。しかし、物質的に満足さへすれば、何人もそのみで慰安が得られると思ふのは、誤解である。食は纔かに腹をみたすに足るといふ程の生活の中にも慰安はあるし、食ふに八珍を列ぬる程のこととしても慰安とはならぬ場合もある。これ全く心の持方一つにあるので、つまり、精神の修養鍛錬が必要なる所以である。心の持方は如何にすればよいか。余は此に對しては、「足るを知り、分を守る」といふ一則を以て答へようと思ふ。

凡そ人の欲望は際限なきもので、一を得て二を欲し、隴を得て蜀を望むは人生の常態である。故に、不足不満は常に如何なる人の心中をも去ることがない。「是で満足した、是で十分だ。」といふ程物質的に満足を得る人は殆ど無からうと思ふ。只精神的修養のある人は不足不満の中に居ても、別段不平に思はぬ。「これで満足である、これで十分である。」といふあきらめがついて其の分を守ることが出来るならば、人生の慰安も自ら其處に生じて來る譯である。道歌に

*事足れば足るにまかせて事足らず、

足らで事足る身こそ安けれ。

とあるのは、よくこの間の消息を道つたものである。

*
天海僧正の歌

慈眼寺

或は、これに消極的の解釋を與へて、「足るを知り、分を守る」といふが如きは進歩を妨げる思想である、保守的の教訓である、反駁する者が無いとも限らない。しかしながら、よく考へて觀れば、慰安と欲望とは全く區別すべきものである。平生足るを知つて其の分を守る間にも、一面には、進取的欲望を持たねばならぬ。唯その欲望を達せんが爲に、世の中の總てを不足に感じ、「まだ足らぬ、まだ及ばぬ。」といふ様に、際限なく行く時は、遂には慾火炎上して、他人の成功を見て猜忌心を起し、嫉妬心を抱く様になる。故に、一方に於ては、常に現在に對して足ることを知り、分を守る心掛を持ち、極端なる欲望を抑壓して、平素の慰安を得る様にすることが肝

要である。佛教に貪嗔痴を去れといふのも、畢竟、この意味である。

人生に於ける慰安の必要なる所以は、一方に活動的生活をなすからである。活動なき所には、慰安も其の必要を感じぬ筈である。それだから、人生の希望と慰安とは全く別問題である。人或は人生の希望は慰安を得んが爲であると解釋し、慰安を得てこれを以て人生に於ける一切のものと差引しようとするものもあるけれども、それは大なる誤解であらう。思ふに、人生の目的、即ち、希望は別にあるので、それを達せんとして活動する間に、慰安の必要を感じて來るまでである。それ故、慰安を得るには足るを知り分を守る

がよいとはいへ、人生の目的に對しては、別に不斷の欲望を持つて居る譯である。従つて、それが爲に發達進歩を阻害され、消極的の人物となり了るといふ心配は無い筈である。即ち、足るを知り分を守ることを忘れぬと同時に、平和の欲望は一時も心を去らしめてはならぬ。欲望を全く人の心より取除いたならば、恐らく、社會の發達進歩は望む可からざることとなつてしまふであらう。唯その欲望にも程合のあることで、健全なる欲望、平和なる欲望、公正無私なる欲望でなければ、欲望は却て害を爲すものである。されば、能く此の間の差別を明かにして、其の判斷を誤らぬやうに心せねばならぬ。つまり、さういふ必然的の欲望を一時も斷つ

ことなくして、向上進歩に志すと共に、又常に其の分に安んずることに心を用ひるがよい。孟子に「君子は終身の憂ありて、一朝の患なし。」とある、この一語の如きは、たしかに慰安の眞意を得た言葉だと思ふ。(青淵百話)

*前鐵道院總裁、法學博士

二〇 奢侈論

添* 田 壽 一

奢侈とは何ぞ。人類の生存進歩若しくは、合理的幸福の増進に益なく、却て生産力を害する消費をいふ。生存に闕くべからざる日用の必需品は勿論、正當なる幸福を増し、生活の情態を高むるに要する普通用品の如きは、固より奢侈品にあらず。たゞし、奢侈は相對的の語なるを以て、各國の情

況各人の位置及び消費の多少等によりて、一定せず。甲の奢侈品は乙の普通用品となり、丙の必需品となることなきにあらず。されど、試みに本邦の現状を標準として、普通人の衣食に供する物品を観察すれば、綿布穀物・鹽・味噌・醬油・薪・炭・油・野菜の如きは日用の必需品にして、絲・入織物・砂糖・魚類・肉類・菓子・の如きは普通用品、絹布・酒・煙草の如きは奢侈品たるを免れざるべし。

抑、奢侈の起因は何にあるか。蓋し、その主因となるものは人心の傾向にあり。人の有せざる所、われこれを有すと誇る虚榮心、その一なり。外見・他聞をよくせんとする修飾の情、その二なり。おのれの耳目口腹の慾を逞しうせんとする

る肉慾その三なり。實用を棄て、流行を逐ふ好奇心、その四なり。此等は何れも人情の弱點にして、各人皆多少の萌芽を有せざるはなし。若し、習俗事變等の副因ありてこれを助成せんか、譬へば、油を以て薪火に注ぐごとく、その勢猛然として、一切を破滅せしめずんば已まざるべし。かの戦勝の結果が人心を驕泰ならしめ、金銀坑の發見が各人の收益を過信せしめ、投機心、射倖心の勃興が人をして金錢を土芥視して、優柔懦弱に流れしむる如きは、何れも奢侈の副因たるものなり。

人若し奢侈の結果に想ひ到らば、誰しも寒からぬに栗せざるはあらざらん。これを個人についていへば、

第一、人をして不健康・無氣力ならしむ。

第二、輕薄・不徳ならしむ。

第三、負債に苦しみ、投機を試みしむ。

第四、破産・零落に陥らしむ。

更に國家についていへば、

第一、不生産的消費を増加す。

第二、資本の減少を致す。

第三、物價の騰貴及び輸入の超過を來す。

第四、租税加重及び外國起債の已むを得ざるに至る。

第五、國家の元氣を沮喪せしむ。

第六、貧富懸隔の觀を顯著ならしむ。

奢侈の結果の恐るべきことかくの如しとせば、國家も個人も極力これを防止せざるべからず。その策如何。試みにこれを擧ぐれば、

第一、各人自ら奢侈を慎むこと。

第二、市町村の申合規約又は信用組合等によりて、共同して奢侈を戒むること。

第三、社會も亦奢侈の風を排斥すること。

第四、國家は奢侈的消費に重税を課して、これを防止する方針を取ること。

等、これなり。就中、第四の方法の如きは最も直接にして、且、有效なるものなり。しかれども、自己若しくは、共同の力に

より、内心より人情の弱點を慎み、自ら進んで其の主因を杜絶することをつとめんこそは、健全にして勇氣ある國民の本領なるべけれ。(經濟教科書)

二 阿波の鳴門

順禮唄の段

近松半二

「普陀落や岸打つ浪は三熊野の那智のお山にひやく瀧つ瀬。年はやうくとをくの道をかけたる笈摺に「同行二人」と記せしは、一人は大悲のかけ頼む、故郷をはるこのにきみる寺、花の都も近くなるらん。」順禮に御報謝といふも優しき國訛。「テモ、しをらしい順禮衆。ドレ、報謝進ぜう。」

大阪の淨瑠璃作者
天明三年歿す。
紀伊國西牟婁郡。

紀伊國海草郡紀三
井寺村。

と、盆にしらけの志。「アイ、有難うござります。」といふ物越から爪はづれ可愛らしい娘の子。「定めて連衆は親御達。國はいづく。」と尋ねられ、「アイ、國は阿波の徳島でござります。」
「ム、何ぢや、徳島。さつてもそれはマアなつかしい。わしが生れも阿波の徳島。そして、父様母様と一緒に順禮さんすのか。」
「イエ、其の父様や母様に逢ひたさ故、それでわし一人西國するのでござります。」と聞いて、どうやら氣にかゝる。

お弓は尙も傍に寄り、「ム、父様や母様に逢ひたさに西國するとは、どうした譯ぢや。それが聞きたい。マア、其の親達の名は何といふぞい。」
「アイ、どうした譯ぢや知らぬが、

三つの年に、父様や母様も、わしを祖母様に預けて、何處へやら往かしやんしたげな。それで、私は祖母様の世話になつて居たけれど、どうぞ父様や母様に逢ひたい、顔が見たい。それで、方々尋ねて歩くのでござります。父様の名は阿波十郎兵衛、母様はお弓と申します。」と聞いて、
「お弓は取付き、ユレ、ユレ、ア、父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つの歳別れて、祖母様に育てられて居たとは疑もない吾が娘と見れば見る程稚顔、見覺のある額の黒子。ヤレ、吾が子か、なつかしやと、言はんとせしが、イヤ、待て、しばし。夫婦は今にも取らるゝ命、元より覺悟の身なれども、親子といはば、此の子にまでどんな憂き目がかゝらうやら。それを思へば、なま

*主君の重寶國次の刀の紛失せしが原にて。

中に名乗だてして憂き目を見んより、名のらで此のまゝかへすのが、却て此の子が爲ならんと、心を静め、よそくしく、「オ、それはマア、年はも行かぬに、遙々の處をよう尋ねに出さしやつたノウ。其の親達が聞いてなら、嘸嬉しうて嬉しうて、飛立つやうにあらうが、儘ならぬが世の憂き節、身にも命にも代へて、かはいゝ子を振棄て、國を立退く親御の心、よくの事であらう程に、むごい親と、必ず恨まぬがよいぞや。」
「イエ、勿體ない。何の恨みませう。恨むる事はないけれども、小さい時別れたれば、父様や母様の顔も覺えず、餘所の子供衆が、母様に髮結うて貰うたり、夜は抱かれて寝やしやんすを見ると、わしも母様があるなら、あ

の様に髮結うて貰はうものと、羨ましようござんす。どうぞ早う尋ねて逢ひたい。ひよつと逢はれまいかと思へば、それが悲しうござんす。」と泣いじやくりするいちらしさ。
母は心も消え入る思。「さても、世の中に、親となり子と生るゝ程深い縁はなけれども、親が死んだり、子が先立つたり、思ふやうにならぬが浮世。此方どれほど尋ねても、顔も處も知らぬ親達。逢はれぬ時は詮ない事。もう尋ねずと、國へ往んだがよいワイノ。」
「イエ、戀しい父様や母様。たとひいつまでかゝつてなと、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は、一人旅ちやて、何處の宿でも泊めてはくれず。野に寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝ては擲かれたり、こはい

事や悲しい事。父様や母様と一緒に居たりや、こんな目には逢ふまいものを。どこにどうして居やしやんすぞ。逢ひたい事ちや。逢ひたい。」と、わつと泣出す娘より、見る母親は堪りかね、「オ、道理ちや、かはいや、いちらしや。」と我を忘れて抱き付き、前後正體なげきしが、是程親を慕ふを、何と此の儘往なされう。いつそ打明け、名乗らうか。イヤ、それでは、此の子も同じ罪。其の時の悲しさを思ひ廻せば、往なすが爲と、「オ、段々の様子を聞き、吾が身の様に思はれて、悲しいとも情ないとも、言ふに言はれぬ事ながら、とかく命が物種、まめでさへ居りや、また逢はれまいものでもない。ユレ、仕つけぬ旅に身を痛め、煩でも出りや、わるい。何處を證

「いかしやる」とあ
るべきところな
り。

「いふべきを詛
りたるなり。」

據に尋ねうより、其の祖母様の方へ往んで居るとノ、追つつけ父様や母様が逢ひにいてちや程に、悪い事は言はぬ、思ひ直して、是からすぐに國へ往んで、随分まめで親達の尋ねて行かしやるのを待つて居るのがよいぞや。」と、宥め賺せば、聽きわけて、「アイ、忝うござります。お前が其の様に言うて、泣いて下さりますによつて、どうやら母様の様に思はれて、わしや此處が往にとむない。どんな事なと致しませう程に、まうし、お家様、お前のお傍にいつまでもわたしを置いて下さりませ。」「エ、悲しい事言出して、また泣かすのかい。先にからわしも子の様に思うて、爰に置きたい、往なしとむないと様々思ひ廻せども、爰に置いてはどうも爲に

ならぬ事が有るによつて、それでつれなう往なすのちや程に、聽分けて往んだがよいぞや。」といひつゝ、内へはり箱の底を採して、豆板のまめなを悦ぶ。錢別と、紙に包んで持つて出で、コレ、なんぼ一人旅でも、たんと錢さへやりや泊める。僅かなれども志、此の銀を路銀にして、早う國へ往にや。必ず必ずわづらうてばしたもんな。」と銀を渡せば、押戻し、「嬉しうござんすれど、銀は小判といふ物をたんと持つて居ります。そんなりや、もう參じます。忝うござります。」と泣くく立つを引留め、「それはさうでも、此は私が志。」と無理に持たして、塵打拂ひ、「コレ、もう往にやるか。名残が惜しい。別れとむない。コレ、今一度顔を。」と引寄せて、見れば見る程胸迫り、離

同上

れがたなき憂き思。それと知らねど、誠の血筋。名残惜しげに振返り、何處をどうして尋ねたら、父様や母様に逢はれる事ぞ。逢はしてたへ、南無大悲の觀音様。「父母の惠も深き粉川寺、佛の誓願もしきかな。」泣くく別れ行く……。

(傾城阿波の鳴門)

二三 皇國の姿

あやみくみのすゝなるらん 知紀

白ふゆなごらばを玉も何ぞんり
まらせらるるに心もよもやも憶良

入乃松のふさやふさあはれなご
子をまらふふらふまらふぬるりのし兼輔

松のふさふさあはれなご
まらふふらふまらふぬるりのし兼輔

東 最系通俊

休みのぼる

物白り

西

まらふぬるり

かまらふぬるり

わらふぬるり

在系葉平

かまらふぬるり

まらふぬるり

はらふぬるり

まらふぬるり

まらふぬるり

大海舟志多して山にゆるりまらふ
まらふぬるりまらふぬるり西行

鳥羽天皇

山はさる海を渡る人喜なりとて
そふりふらふらわきあはるるも實物

埋^うの^り 松平 定信
あふり ねんごう
か^りけ^り さらけ
か^られ さらけ
ま^さあ さらけ
よ^うけ

あ^らは^れ 赤染衛門
か^らら^し さらけ
ら^らの^まま さらけ
は^らの^まま さらけ
け^り

(二) 徳川時代の小説家、文化文政頃の人。

(三) 名は番作。村雨の刀。

(四) 下總國猿島郡古河。

二三 芳流閣上の奮闘

瀧澤馬琴

古の人謂はずや、禍福は糾ふ纏まの如し。一人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所、將た禍の伏す所、彼にあれば此にあり、とは思へども、豫てより誰かよくその極きはみを知らん。憐むべし、犬塚信乃は親の遺言、記念の名刀、心にしめつ、身につけつ、艱苦の中に年を経て、得難き時を得てしかば、はるる、濟我へ齋して、名を揚げ家を興すべかりし、その福は禍とふりかはりたる村雨の刃は舊もとの物ならで、わが身を劈く讐とぞなりし、憾をこゝに釋くよしもなく、絆絆急にして意外にあり。僅かに當座の辱を避けばやと思ふ

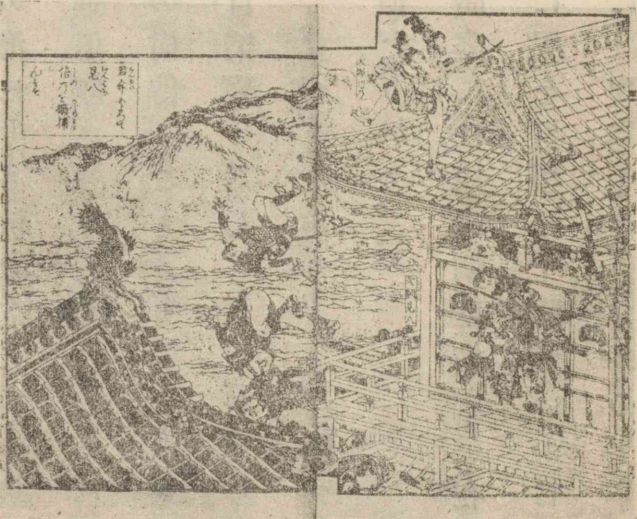
ばかりに、夥の圍を切開きて、芳流閣の屋の上に攀登れども、とにかくに脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を窮めたる、心の中はいかなりけん。想ひやるだにいと痛まし。されば、又、犬飼見八信道は犯せる罪のあらずして、月來獄舎に繋がれし禍は、今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞかかる、捕手の役義。犬塚信乃を搦めよとて、慙に擇み出されつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられんこと願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く、彌高き彼の樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の燄熱をわたる敷

瓦は、凸凹隙なく、波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝る流は名に負ふ坂東太郎、水際の舟楫を絶えて、進退既に谷りし敵にしあれば、いかでわれ繋ぎとめんと、鼉の樹傳ふごとく、さらくと登りはてたる三層の屋根には、目柴翳すよしもなく、かたみに隙を窺ひつゝ、にらまへ、あうて立つたるありさま、浮圖の上なる鶴の巢を巨蛇の狙ふに似たりけり。

廣庭には成氏朝臣、横堀史、在村等の老黨、若黨圍繞せし床几に尻を打掛けて、勝負いかにと見上げたり。亦、只、閣の東西には、腹卷したる許多の士卒、鎗長刀を晃かし、或は箭を負ひ、弓杖つき立て、組んで落ちなば撃ちとめんとて、頂を反らし

古河公方足利成氏。

(一)「捷ら得とも」とあるべきところ。
 (二)「借らずば」とあるべきところ。
 (三)「借らずば」とあるべきところ。
 (四)公輪般。魯の人。
 (五)「雲梯なくば」とあるべきところ。
 (六)「鳥なられど」とあるべきところ。
 (七)「獸なられど」とあるべきところ。
 (八)「息絶えば」とあるべきところ。



てこれを観る。加之、外のかたは綿連として杳かなる河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ち得るとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲梯なければ、地上に下るべくもあらず。彼鳥ならずも羅に入りぬ、獸ならずも狩場に在り。三寸息絶ゆれば、緋み

(一)飲明天皇七年百濟に使者しとき虎穴に入りて虎を刺殺し人。
 (二)和田義盛の士、源實朝の面前にて長三尺方七寸の大鹿角二箇を一度に折りたる人。
 (三)「あらん」とあるべきところ。
 (四)「よき敵にこそござんたれ」は誤、「よき敵ござんたれ」とあるべきところなり。

な休まん。脱れ果てじ。と見えたりけり。その時、信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで追ひのぼらんとせし兵等を斫落しつる後は、絶えて近づく者もなきに、今たゞひとり登りきぬるは、よに覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴提便が虎を暴にする勇あるか、又富田三郎が鹿の角を裂きたる力あるか。遮莫一箇の敵なり。ひつ組んで、刺違へ、死するに難きことやはある。よき敵にこそござんなれ、目に物見せん。と血刀を袴の稜もて推拭ひ、高瀬の如き方桴に立つたるまゝに、寄するをまてば、見八も亦思ふやう、かの犬塚が武藝勇悍、素より萬夫無當の敵なり。さりとても、搦めかねて、他の援を借ることあらば、獄舎の中より

「なからん」とある
べきところ。
「撃たるとも」とある
べきところ。

この役義に擇み出されしかひもなし。搦め捕るとも撃た
るゝとも、勝負を一時に決せんものを。」と思ひにければちつ
とも擬議せず、御諚さふと呼掛けて、もつたる十手をひらめ
かし、飛ぶがごとくに方桴の左の方より進み登りて、組まん
とすれども、寄せ附けず。心得たりと鋭き太刀風に撃つを
はつしと受留めて、拂へば、透かさずこむ刀尖をさゝへて流
す一上一下、這る蔓を踏みとめて、しきりに進む捕手の秘術
かなたもおとらぬ手練の働嵩より落す太刀筋をあちこち
外す虚々實々。未だ勝負を判かざれば、廣庭なる主従士卒
は手に汗握らざるもなく、瞬きもせず、氣を籠めて、見るめも
いとゞはるかなり。

さる程に、犬塚信乃は侮り難き見八が武藝に、敵を得たりけ
りと思へば、勇氣いやまして、刀尖より火出づるまで、寄せて
は返す太刀音かけ聲、兩虎深山に挑むとき、錚然として風起
り、二龍青潭に戦ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき
春ならば峯の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなるい
と高き閣の棟にして、死を争ひし爲體よに未曾有の晴業な
れば、見八は被籠の鎖、肱當の端を裏かくまでに切裂かれし
かど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かて、初に淺瘻を負
ひしより、次第に疼を覺ゆれども、足場を揣りて撓まず、去ら
ず、疊みかけて撃つ太刀を見八右手に受流して、かへす拳に
つけ入りつゝ、やつとかけたる聲と共に、眉間を望みてはた

「あはせて」とある
「あらざれば」とある
「あらざして」とある
「あらざれば」とある
「あらざして」とある
「あらざれば」とある
「あらざして」とある

「あらざれば」とある
「あらざして」とある
「あらざれば」とある
「あらざして」とある
「あらざれば」とある
「あらざして」とある

「音する」とあるべ
きところ。

と打つ、十手を丁と受けとむる、信乃が刃は鏝際より折れて、遙かに飛びうせつ。見八得たりとむづと組むを、そがまゝ左手に引着けて、かたみに利腕しかととり、振倒さんと、えいごゑあはして、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく蹈たらして、河邊の方へころくゝと身をまろばせし覆車の米苞坂より落すに異ならず。勾配けはしき棧閣かたがきに削りなしたる薨この勢と、まるべくもあらざめれど、かたみにとつたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より末遙かなる河水の底には入らで、程もよし、水際に繋げる小舟の中へうちかきなりつづどうと落つれば、傾く舷へらと立つ浪にざんぶと音す水煙纜すゐえんりょうちようと張りきりて、射る矢の如き早河の直中ただなかへ吐出され

つ。しかも、追風と退く潮に誘ふ水なる下り舟、往方も知らずなりにけり。(南總里見八犬傳)

◎ 八犬傳回外剩筆

瀧澤馬琴

文化十一年より天保十二年まで二十八年間。

今茲、天保十二年辛丑の秋、葉月まで、星霜二十八な年にて、本傳稿本、思ひのまゝに全局を結びぬ。われ若歳わかさいの時よりして、書讀むことを好みしかば、人と成るに及びては、一日も書卷を把らざることなし。かくて寛政二年の冬、始めて戲墨の繪草子二卷を編みてより、今に至りて五十二年刊行の雜書物の本、共に二百九十餘筆に及べり。此の他、刊行せざる筆記雜纂、數へ盡すべうもあらず。就中、文化の頃は、日毎に夙におき出でて、机に向ひつゝ、其の夜亥の時過ぎては、睡氣づくまで書を読み、自らの樂みにす。若し佳境に入る時は、夜の明くるを覺えず、隣雞の鳴くに驚かされて、やがて、おき出でて又机に向ふ日もありけり。かくて、年頃を経るまゝに、逆上、口痛の患起りしより、年

五十に至りては、齒はみな年々に脱けて、一枚もあらずなりぬ。且、夜、枕に就く時、仰ぎ臥せば、眩暈して堪へられず、横に臥せば、さもなかりき。この頃、一名醫と暗譚の折此の事を告げしかば、名醫驚きて、足下生來血氣人に勝れたれども、人の氣根は涯あり。九石の弓も、毎に緊しく張りて、弛めざれば、其の弦斷れざるを得ず。其の樂む所をもて、名利のために殉するは、賢者のせざる所なり。今より少し緩めよ。といはれし由の理なれば、これより夜學せず、夜は亥の時を限りにして、早く枕に就きしかば、身も漸々に安く覺えて、仰ぎ臥しても、眩暈せず。ひたすら養生をむねとしける程に、わが還曆の年、丁亥の夏より秋まで、大病に罹りて、命危かりしかど、幸



琴馬深淵

にして瘥えにき。

とかくする程に、癸巳の秋八九月の頃にやありけん、或朝ふとおき出でけるに、右の一眼見ることを得ず。打驚き、且、訝りて、故兒に示すに、瞳子の上方流れたり。療治なさるべし。といひけり。其の後、親戚朋友書賈等治療を勸むる者多かりしかど、吾敢て従はず、且、思へらく、吾は幼稚より眼の患なく、流行目だにも病みしことあらず。さるを、今一朝に右明を失ひしは、年來讀書筆研の疲勞なるべく、且、冬春毎に高さ火桶を座右に置きて、机邊の寒さを防ぐこと、既に久しくなりしかば、其の火氣、何時となく右明に入りて、乾かされたるにぞあらんずらん。譬へば、老樹の片枝立枯れたるに異ならず。よしや醫療に手を盡すとも、草根木皮のよく及ぶべきにあらず。と思案して、一日も筆研を排斥せず。初は、硯心見えかねて毫を染むるにも不便なりしに、夫も慣れては不便にも思はず。其の後、故兒の憂に當りし年も、世渡なれば、忌ども果て、は、また筆を把らざることを得ず。其の次の年、四谷へ移徙しても、左明は異なることもなければ、著編は、尙、年々に綴りぬる程に、戊戌の春の頃より、何となく、左明も亦翳むやうなりし

天保四年

宗伯、琴嶺と號す。天折す。

天保九年

天保十一年

に、夏に至りては愈、其の異なるを覚えしかども、尙悟らず。こは眼鏡の曇りたる故ならんと、謬り思ひて、俗に本玉とかいふ水晶製の眼鏡の價貴きを厭はで、これかれと多く購ひ求めて、掛替へく、凌ぐものから、己亥の春に至りては、愈、翳みて、病眼なるを知りながら、本傳いまだ大團圓に至らねば、書肆の需を辭みもえせで、なほ辛うじて綴るものこの外にもありけり。かくて、去歲の春までは、本傳の稿本も、故の如く十一行の細字にもせしかども、夏に至りては、只朦々朧々として細字を書くことえならねば、其の稿本を五行の大字にしつゝ、そも、手探りにて、去年の秋九月、本傳第九輯四十五の巻まで綴り果して、刊行の書肆の責を塞ぎにき、かくては、明年四十六の巻以下を綴り果さん事心もとなし。いでや、尙かくてある程に、今一卷なりとも綴らばやと、愚心を勵して第九輯百七十七回「一類の智玉途に一騎の驕將を懲す」といふ一段を、五行或は四行の大字にもものしぬるに、字の形もしどろもどろにて、且、墨のつかぬ處ありてよみ難しといへば、そをやからに補はせなどしぬる程に、十一月に至りては、宛ら雲霧の中に在る如く、又、朧月夜に立てるに似て、一字も書く事えならず

天保十二年

なりぬ。只筆研不自由なるのみならず、書畫を見ても、しかと見えず、綴かに晝夜を辨じ、東西を知るのみ。いかにともせん術なければ、机を退け筆を投捨て、獨り歎息の餘りに、

ながらふるかひこそなけれ、見えずなりし

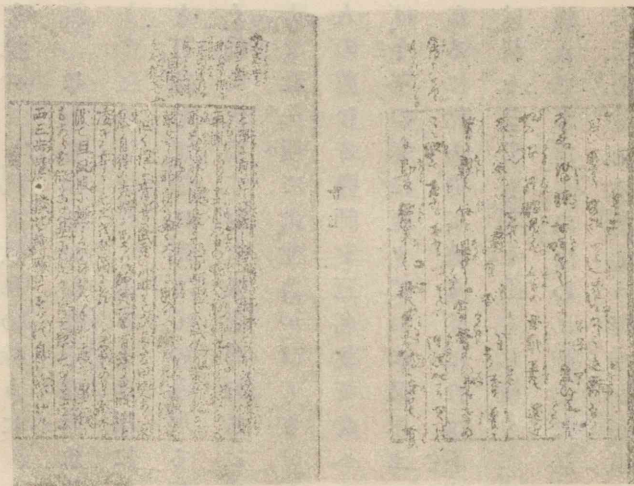
ふみまき川になほわたる世は。

と打詠じて、爐に寄りてのみ居る程に、人々聞知りて、皆慨しく思はぬはなく、爲に代寫すべき人を尋ぬるに、意に叶ふ者のあるべくもあらず。われもまた失明ては、生きがひもなければ、此の年の秋九月よりつぎの年まで、人の薦むる醫師を三名までかへたれども、未だちとも効驗あらず。されば、今年の春に至りて、われ又思ふに、八犬傳は今昔あり難き大部の物の本なるに、始ありて終なくば、たゞ看官の飽かず思はんのみならず、刊行書肆は後々までも利を全くし難くて、遺憾しくこそあらんすらめ。人の爲に謀りて忠ならぬは、われもまた恥づる所なり。さればとて、わが孫興邦は、なほ乳臭ある机心うせずかつ、武藝を好める本性なれば、かゝる幫助になるべくもあらず。彼が母は、人並に、にじりがきもすなれば、教へて代寫さ

天保十二年

天保十二年

せばやと、やうやくに思ひかへしつ。第一百七十七回の中おとこ「音音」が大茂林濱



馬琴自筆の部 代書稿の部

にて再生の段より代筆させて、一字毎に字を教へ、一句毎に假名遣を誨ふるに、婦人は普通の俗字だにも知るは稀にて、漢字雅言を知らず、假名遣にては、だにも辨へず、扁旁すら心得ざるに、只言語をのみもて教へて書かするわが苦心は、いふべうもあらず。まいて、教を承けて書く者は、夢路を辿る心地して、困じて、果ては打泣くめり。さて、代寫一枚に滿つれば、讀反させて、また教へて傍訓を書かするに、熟字を知らず、又、句讀を心得ねば、讀む時或は字を脱し、或は無き字を添へて讀むめり。讀むすら容易からざる

に、知らず心得ざる事を口授せられて書く者の艱難を思へばいと痛ましきに、幾度か止めばやと思ひしを、また思ひかへして、

筆捨ての松のふる葉も言の葉も

子等にをしへてかゝするを憂き。

と打詠じて、かつ慰めつゝ、一二卷代寫させぬる程に、彼もやうやくに慣れて、苦心初の如くにはあらず、扁旁などは稍辨へ知りて、言を費すも、舌の疲るゝまでに至らず。篇中の挿繪は代寫さすべき者なければ、われ只其の人物を圈點して畫工に傳ふるに、こまかに註文を代寫させぬるのみ、稿本はさらなり、書畫工の寫本も、わがいふ如く書けりや、あらずや、心許なく思へども、術なし。まいて、文中に故事などを引用ひんと思ふに、原本に涉らざれば、語記の過あらんことを恐れて、命じて、其書を取らせ、讀まするに、漢籍は及ぶべくもあらず、假名まじりの古書と雖も、傍訓なきは、え讀まず。強ひて讀ますれば、缺舌侏離にて、用をなさねば、援用ふべくもあらず。書かすることは教へもすれど、讀ますることは、吾が見るにあらざれば、いよ、難儀にて、實にせん方なし。然れども、教誨を承くる者の困じながら、

も、倦までよく勉むるにあらざれば、この十卷を綴り果して、局を結ぶに至らんや。縫刺の技薪炊の事などこそ彼が職分なれ、文墨風流の事に代らせて、その用をなさせまく欲りするは、理なしとも理なしと知りつゝも、月を累ねて、今茲辛丑の秋八月二十日といふ日に、本傳百八十勝回の下編附録目録「諸將の成敗其の尾を備にす」といふ結局大團圓までや、稿じ果てたりき。噫、益なし。老の諄言よ。

二四 有王島下り

平家物語

さるほどに、鬼界が島の流人ども、二人は召還されて都へのぼりぬ。今一人残されて、うかりし島の島守となりにけるこそうたてけれ。僧都の稚うより不便にして召使はれる童あり、名をば有王とぞ申しける。鬼界が島の流人ども、今日既に都へ入ると聞えしかば、有王島羽まで行向つて見

鎌倉時代の軍記
薩摩の南方に在る
島、今の大島なら
んといふ。
三 丹波少將成經
平判官康頼
四 俊寛僧都

尚
ゆ
ゆ
ゆ

けれど、我が主は見え給はず。如何にと問へば、それはなほ罪深しとて、一人島に残されぬと聞いて、心うしなども愚なり。常は六波羅邊に佇みて聞きけれども、何時赦免あるへしとも聞出さざりければ、僧都の御女の忍うておはしける所へ参りて、此の瀬にも洩れさせ給ひて御上りも候はず。今は如何にもしてかの島へわたつて、御行方をも尋ね参らせばやと存じ候。御文賜はつて参り候はん。」と申しければ、姫御前斜ならず悦び、やがて書いてぞたうでける。暇を乞ふとも、よも赦さじとて、父にも母にも知らせず、唐船の纜は四月五月に解くなれば、夏衣たつを遅くや思はれけん、彌生の末に都を立ちて、多くの波路を凌ぎつゝ、薩摩がたへぞ

下りける。

薩摩より彼の島へ渡る船津にて、有王を人怪しめ、着たる物を剥ぎとりなどしけれども、少しも後悔せず、姫御前の御文ばかりを人に見せじとて、髻結もとの中には隠しける。さて、商人船に乗りて、件の島へわたりて見るに、都にて幽かに傳へ聞きしは事の數ならず。田もなし、畑もなし、里もなし、村もなし。おのづから人はあれども、言ふ詞をも聞知らず。有王島の者に行向ひて、「もの申さう。」といへば、「何事。」と答ふ。「これに都より流されさせ給ひたる法勝寺の執行俊寛僧都と申す人の御行末や知りたる。」と問ふに、法勝寺とも執行とも知つたらばこそ返事はせめ、たゞ頭を振つて、「知らぬ。」とい

山城國愛宕郡岡崎に舊址あり。

人やおはするしなどいふべきところなり。

ふ。其の中にある者が心得て、「いさとよ。然様の人は三人是にありしが、二人は召還されて都へ上りぬ。今一人残されて、あそここゝよと迷ひありきしが、其の後は、行方をも知らず。」とぞいひける。

山の方の覺束なさに、遙かに分入り、峯に攀ち、谷に下れども、白雲跡を埋んで、往來の道もさだかならず。晴嵐夢を破つては、其の面影も見えざりけり。山にては、遂に尋ねも遇はず、海の邊について尋ぬるに、沙頭に印を刻む鷗沖の白洲に、すだく濱千鳥の外は、跡問ふ者もなかりけり。或朝、磯の方より、蜻蛉などの如くに瘦衰へたる者よろぼひ出できたり。もとは法師にてありけりと覺えて、髪は空

山遠雲、行方跡、松子風、旅人書

津波、鷗、遊處

水底、怪、性、性

此後、明、水、岸

六道の一、常に戦
 事をとする處とい
 ふ。又、單に修羅
 ともいふ。
 地獄・餓鬼・畜生・
 の三道をいふ。
 三惡道に修羅を加
 へたるもの。

様に生ひ上り、萬の藻屑取りつけて、荊を戴きたるが如し。
 節つぎ顯れて皮ゆたひ、身に着たるものは絹布のわきも見えず。
 片手には荒海布あらかいを持ち、片手には魚を貫うて持ち、歩むやう
 にはしけれども、はかもゆかず、よろゝとしてぞ出來たる。
 都にて多くの乞巧人こころびとは見しかども、かゝる者は未だ見ず。
 「諸阿修羅等故在大海邊」とて、修羅の三惡四趣さんあくしよは深山・大海の
 邊に在りと佛の説置き給ひたれば、知らずわれ餓鬼道など
 へ迷ひ來たるかとぞ覺えたる。はやかれもこれも次第に
 歩み近づく。若し斯様の者にても、我が主の御行方や知つ
 たらと、物申さう。といへば、「何事。」と答ふ。「是に都より流さ
 れ給ひたりし法勝寺の執行俊寛僧都と申す人やまします。

と問ふに、わらはこそ見忘れたれども、僧都はいかでか忘れ
 給ふべきなれば、「是こそそれよ。」と宣ひもあへず、手に持てる
 物を投棄て、沙の上にご倒れ伏す。さてこそわが主の御
 行方とは知つてけれ。僧都やがて消入り給ふを、有王膝の
 上にかきのせ奉り、多くの波路を凌ぎつ、遙々と是まで尋
 ね參つたるかひもなく、如何にやがて憂目をば見せんとは
 せさせ給ひ候ふぞ。と、さめふ。とかき口説きければ、僧都少
 し人心地いでき、扶け起され、誠に汝多くの波路を凌ぎつ、
 遙々とこれまで參つたるこそ神妙なれ。たゞ明けても暮
 れても、都の事をのみ思ひ居たれば、戀しきものどもの面影、
 夢に見る折もあり、また、幻に立つ時もあり。身もいたう疲

れ弱りて後は、夢も現も思ひわかず。今汝が來れるをも、只夢とのみこそ覺ゆれ。若し此の事の夢なりせば、覺めての後は如何せん。」有王、「こは現にて候ふなり。さて、この御有様にて、今まで御命の延びさせ給ひたるこそ不思議には覺え候へ。」と申しければ、「いさとよ。是は去年少將や判官入道が迎の時、其の瀬に身をも投ぐべかりしを、よしなき少將の『今一度都の音信をも待てかし。』など慰め置きしを、愚に若しやと頼みつゝ、ながらへんとはせしかども、この島には人の食物も絶えてなき所なれば、身に力のありし程は、山に登つて硫黄といふ物を取り、九國より通ふ商人に遇ひ、食物に換へなどせしかども、日にそへて弱りゆけば、今は然様の業

もせず、斯様に日の長閑なる時は、磯に出でて、網人・釣人に手を摺り、膝を屈めて魚を貰ひ、汐干の時は貝を拾ひ、荒海布を取り、磯の苔に露の命を懸けてこそ、憂きながら今日まではながらへたれ。さらでは、うき世を渡すすがをば如何にしつらんとか思ふらん。僧都、「これにて何事をもいはばやとは思へども、いざ、我が家へ。」と宣へば、有王、あの御有様にて、家を持ち給へる不思議さよと思ひ、僧都を肩に引懸け、參らせ、教に従つて行く程に、松の一村ある中に、寄り竹を柱とし、蘆を結び、桁・梁にわたし、上にも下にも松の葉をひしと取懸けたれば、雨風たまるべくも見えず。有王、「あな、あさまし。もとは法勝寺の寺務職にて、八十餘箇所の庄務を司り給ひ

しかば棟門・平門の内に、四五百人の所從眷屬に圍繞せられておはせし人の、眼のあたりかゝるうきめに逢はせ給ふ事の不思議さよ。業に様々あり。順現・順生・順後業と云へり。僧都一期が間身に用ふる所、皆大伽藍の寺物・佛物ならずといふことなし。されば、彼の信施無慚の罪に依つて、今生にて早感ぜられけり。とぞ見えたりける。

僧都、こは現にてありけりと思ひ定めて、去年、少將や判官入道迎の時も、是等が文といふこともなし。今また汝が便にも、かくとも言はざりけりな。と宣へば、有王涙に咽びうつふして、暫しは御返事にも及ばず。やゝあつて、起き上り、涙を抑へて申しけるは、君の西八條へ出でさせ給ひし後、官人參

*清盛の邸を指す。

*「参らせさせ給ひ」の約りたるものなり。次々のも皆この類なり。

つて資財雜具を追捕し、御内の者ども搦め取り、御謀叛の次第を尋ね問ひ、皆失ひ果て候ひき。北の方は幼き人を隠しかね参らせさせ給ひて、鞍馬の奥に忍んでお渡り候ひしにも、この童ばかりこそ、時々参つて御宮づかへ仕り候ふなれ。何れも御歎の愚なる方は候はねども、なかにも稚き人は、餘りに戀ひ参らせさせ給ひて、参り候ふ度毎には、如何に有王よ。われ鬼界が島とかやへ具してまゐれ。とのたまひて、むづからせたまひしが、過ぎ候ひし二月に、もがさと申す事に失せさせおはしまし候ひぬ。北の方はその御歎と申し、又、この御事と申し、一方ならぬ御物思に思召し沈ませ給ひて、打臥させたまひしが、去ぬる三月二日の日、遂にはかなくならせ

姫の鏡。

給ひて候ひぬ。今は姫御前ばかりこそ、奈良の姨御前の御許に忍うておはしける、それより御文賜はつて參つて候ふ。とて、取出で奉る。僧都之を開いて見給へば、有王が申すに違はず書かれたり。奥には「などや三人流されてまします人の二人は召還されて候ふに、何とて一人残されて今まで御上りも候はぬぞ。あはれ、高きも卑しきも、女の身程いかひなきことは候はず。男の身にても候はゞ、渡らせ給ふ島へもなか尋ねまゐらて候ふべき。此の童を御伴にて、急ぎ上らせ給へ。」とぞ書かれたる。「これ見よ。有王よ。この子が文の書き様のはかなさよ。おのれを伴にて急ぎ上れと書いたる事の恨めしさよ。俊寛が心に任せたるうき

*中納言藤原兼輔の歌。

身ならば、いかでか此の島にて三年の春秋をば送るべき。今年は十二になると覺ゆるが、これ程にはかなうては、いかでか人にも見え、宮仕をもして身をもたすくべきか。」とて泣かれけるにぞ、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふ。とは、今こそ思ひ知られけれ。此の島へ流されて後は、曆もなければ、月日の立つをも知らず、只自ら花の散り、葉の落つるを見ては、三年の春秋を辨へ、蟬の聲、麥秋を送るは夏と思ひ、雪の積るを冬と知る。白月・黒月の變り行くを見ては、三十日を辨へ、指を折つて數ふれば、今年は六つになると覺ゆる稚き者も、はや先立ちけるごさんなれ。西八條へ出でし時、此の子が行かんと慕ひしを、やがて還らうずるぞと

慰め置きしが、只今のやうに覺ゆるぞや。それを限とだにも思はましかば、今暫しもなどか見ざらん。親となり、子となり、夫婦の縁を結ぶも、皆此の世一つに限らぬ契ぞかし。今は姫がことばかりこそ心くるしけれども、それは生身なれば、嘆きながらも過さんずらん。さのみながらへて、おのれにうき目を見せんも、我が身ながらつれなかるべしとて、自ら食事をとゞめ、偏に彌陀の名號を唱へ、臨終正念をぞ祈られける。有王わたつて二十三日と申すに、僧都庵の中に、遂に終り給ひぬ。年三十七とぞ聞えし。有王空しき姿に取付き奉り、天に仰ぎ地に俯し、心の行くほど泣飽きて、やがて、後世の御供仕るべう候へども、此の世には姫御前ばかりこそ渡らせ給ひ候へ。後世弔ひ參らすべき人も候はず。暫く存へて、御菩提を弔ひ參らすべし。とて、臥戸を改めず、庵を切懸け、松の枯枝、蘆の枯葉をひしと取懸けて、藻壚の煙となし奉り、茶毘事終りぬれば、白骨を拾ひ、頸に懸け、また商人船の便にて九國の地にぞ着きにける。其より僧都の御女の忍うで坐しける御許に參つて、ありし様を初より細々と語り申す。「なか／＼文を御覽じてこそ、いとゞ御思はまさせ給ひて候ひしか。件の島には硯も紙も無ければ、御返事にも及ばず。思召されつる御事どもはさながら空しうて止み候ひぬ。今は生々世々を送り、他生曠劫をば隔て給ふとも、争てか御聲をも聞き、御姿をも見參らさせ給ふべき。

大和國添上郡佐保村。

紀伊國高野山。

只如何にもして御菩提を弔ひ參らさせ給へ。」と申しければ、
姫御前聞きも敢へ給はず、臥轉びてぞ泣かれける。やがて、
十二の歳尼になり、奈良の法華寺に行ひすまして、父母の後
世を弔ひ給ふぞ哀なる。有王は俊寛僧都の遺骨を頸にか
け、高野へ上り、奥の院に納めつゝ、蓮華谷にて法師になり、諸
國七道修行して、主の後世をぞ弔ひける。かやうに人々の
思ひ歎きの積りぬる平家の末こそ怖しけれ。

二五 よせぎれ

四方赤良

莊周も猫におはれてうなされん、

胡蝶となりし春の夜の夢。

鹿都部眞顔

争はぬ風の柳の絲にこそ

堪忍袋ぬふべかりけれ。

葛飾の龍眼寺にて萩を見侍りて、朱樂菅江

よせぎれと見ゆる御寺の飾かな、

どこもかしこもはぎだらけにて。

盡語樓内匠

武藏野の月はむかしにかはら屋の

から草を出でてから草に入る。

藤のまん丸

武藏野の月
又ら
よせぎれ
草から出でてから草に入る

鬼は外福は内へと煎豆に

花さく春をまつ年のくれ。

花道のつらね

樂みは春の櫻に、秋の月、

夫婦中よく三度くふめし。

宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれ、天地の

うごき出してはたまるものは。

鎌倉時代の軍記。

平清盛。入道して
淨海といふ。

二六 忠度都落

源平盛衰記

薩摩守忠度と申すは入道の舍弟なり。淀の川尻まで下り

*
皇太后宮大夫藤原
俊成。五條京極に
住めり。

たりけるが、郎等六騎相具して、忍びて都へ歸り上る。如法
夜半のことなるに、五條三位俊成卿の宿所に行きて、門を敲
く。内にはこれを聞きけれども、かゝる亂れの世なる上、い
ぶせき夜半の事なれば、敲けどもく、あけざりけり。餘り
に強く敲きければ、やゝ久しくありて、青侍をいだし、戸を開
かてこれを問ふ。「忠度と申す者、見參に申し入れたき事あ
りて、參りたり。」と答へければ、三位大庭に下り、世に恐れて内
へは入れざりけれども、門をば細めに開きて、對面あり。忠
度のたまひけるは、「かゝる身として御爲憚りあれども、所詮
一門榮花盡きて、都に安堵せず、西海へ落下り侍り。亡びん
こと疑なし。世靜まりて後、定めて勅撰の沙汰候はんか。

縦ひ身は八重の鹽路の底に沈むとも、藻鹽草かきおく末の
 言の葉、後の世までも朽ちぬ形見に傳はり侍れかしと思ひ
 出して、川尻よりしのび上つて侍り。これぞ年ごろよみ集
 めたりし愚詠どもにて侍る。身と共に波の下に水屑とな
 さんこと遺恨に侍り。これを砌下に進らせ置き候ふ。勅
 撰の時は、必ず思召し出せよ。とて、卷物一卷泣くく、鎧の引
 合より取出したり。

三位感涙を流してこれを受取り、御詠一卷預かり置き候ひ
 をはんぬ。これ永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南たらん
 か。この忽劇の中に御音信に預かること、恐悦少なからず、
 候ふかな。たとひ浮生を萬里の波に隔つとも、御形見をば

大江朝綱の作。和
 漢朗詠集に見ゆ。

一戸の窓にをさめて、勅撰の時は、思ひ出し侍るべし。とのた
 まへば、忠度、今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも、思
 ふことなし。とて、馬に乗り、古詩を

前途程遠、馳思於雁山之暮雲。

後會期無、霑纓於鴻臚之曉淚。

とうちあげく、詠じつ、南を指してぞ落行きける。本文
 には「後會期遙」と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今
 を限の別なりと思ひければ、「後會期無」と詠じけるこそあは
 れなれ。三位もなごりの惜しくして、遙かにこれを見送り
 ても、あはれ、世に在りしには、この人どもにこそ詔ひ追従せ
 しに、變る習とて、今は門を隔つることの悲しさよ。と、あはれ

〔二〕後鳥羽天皇の文治三年、後白河院の院宣によつて勅撰す。

〔三〕天智天皇の都したまひしところ。

〔三〕「ながら」に「長良」をかく。長良山は近江國滋賀郡にあり。

なるにも涙優なるにも涙、しのびの袖をぞ絞られける。
世静まりて後、千載集を撰まれけるに、忠度のこの道を嗜み
川尻より上りたりし志を思ひ出し給ひて、故郷の花といふ
題に「よみ人知らず」とて、一首入れられたり。

さゝ波や志賀の都は荒れにしを、

昔ながらの山ざくらかな。

とよめる歌なり。名字をも顯はし、數多も入れまほしかり
けれども、朝敵となれる人のわざなれば、憚りたまひて、只一
首ぞ入れられける。亡魂いかに嬉しく思ひけん。あはれ
にやさしくぞきこえし。

二七 カルナバル祭

菊池幽芳

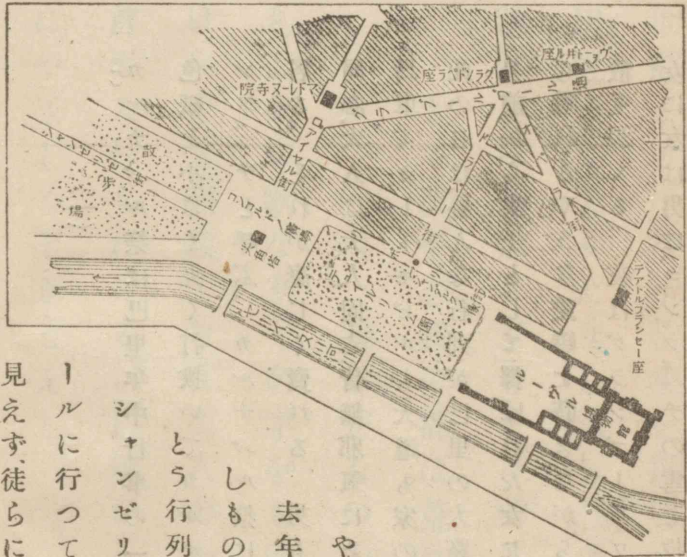
(一)

〔二〕謝肉祭と譯す。精進に入る前日の祭。

〔二〕カルナバル祭は巴里年中行事の一番の見物である。

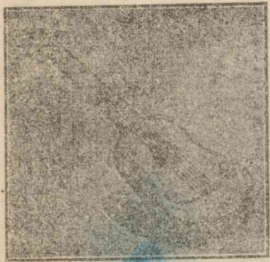
色紙を小さく丸く打抜いてカルナバル祭に投合ふものを、佛蘭西ではコンフェッチと呼ぶ。カルナバル祭には小商人が袋に入れて大道で賣つて居る。それが凄じく賣れる。男も女もそれを抱へて出る。子供は子供同志、大人は大人同志、皆無邪氣にそれを投合ふ。この日一日は、人も犬も馬車もオートモビルも大道の中もみなコンフェッチだらけになる。此の日は、盛んな行列が巴里の大路を通る。澤山な山車が出る。二三ヶ月前から女王として擇ばれた女たちが、美しい衣を着けて、花馬車の上から零れるやうな愛嬌を蒔きながら通る。コンフェッチの雪が行列の上に散りかゝる。夜はグランプールグールの大路を通ふ車馬を禁めて、男は女に、女は男に、コンフェッチの雪を投合ふ。これが巴里のカルナバル祭當日の光景である。

〔三〕大通りと譯す。地圖につきて見よ。



去年のカルナバル祭の三月十八日は、途中から雨となり、紅白の雪とつもるコンフェッチが風に吹かれ雨に打たれて哀れに大路を彩つたが、今年のカルナバル祭は三月の三日で終日終夜暖かな春日和であつたので、いやが上にも人の心を浮立たせた。去年はコンコルドの廣場で見物したが、少しもの廣場も男女の帽子で眞黒になり、とうとう行列を善く見ることが出来ず、やり過してシャンゼリゼーに、マドレーヌに、グランブールヴールに行つて見たが、到る處人の山で、行列はよくも見えず、徒らにコンフェッチの雪を浴びて歸つた。今年はその経験に教へられて、晝飯を済すとすく

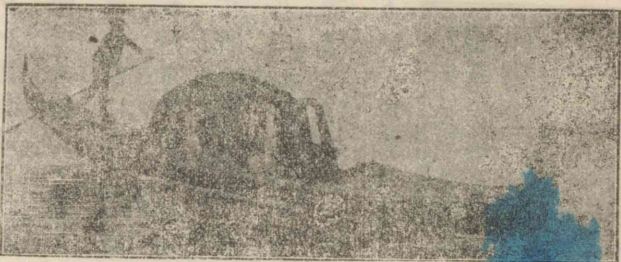
*中部伊太利亞の港、英語にていふネーブルスのこと。



にリボリ街に出かけて、テューイルリー公園とこの町との仕切の鐵柵の低い石垣の上に腰をかけて待構へた。公園の鐵柵はコンコルドからルーブル博物館まで七八町は續いてゐるだらう。それが皆二時間でも三時間でも待つて居ようといふ我が黨の男女に占領されて、隙間がない。鐵柵の後にも、この隙から見物しようといふ人間が一杯に押合つて居る。われらの前を行列の番附賣女王の繪葉書賣、假面賣、鬻賣などが聲を嗶して往き來する。僕は行列の番附を買つて見たり、新聞を出して讀んだりして、時の來るのを待つてゐたが、大波のやうなさゞめき、浮れ狂ふ人の聲、音風に連れる太鼓の音などが絶えず耳に響くので、とかくその方にはかき氣を取られる。またうつかりして居ると、通りすがりの女にコンフェッチを投げつけられる虞もあるので、用心しながら、石垣に腰を下して、眼の前の天地に起る小さな現象を観察し始めた。

ナポリ人に扮した二人の女が同じ風俗のギターを抱へた男と向側を通る。皆の眼がそれに注が

北部伊太利の港。
佛國の劇作者。
佛國の西部。



ラ ド ン ゴ

れる。ギターを抱へた風俗が如何にも面白いと思ふ間もなく、姿は人込
の中に消えて了ふ。ゴンドラの上でギターを聞
いたヴェニス(二)の夜を憶ひ起して居る中にロスタ
ンの動物劇の主人公シヤントクレトルの鶏に扮
した子供が現はれる。ノルマンデー(三)の鄙びた風
俗をした小娘や、道化人形に装つた可愛い男の兒
などが通る。その間を赤や黒の眼かづらをかけ
た男女が幾組ともなく往き來する。
僕は佛蘭西人が好きだ、お祭の日の佛蘭西人が殊
に好きだ。氣輕で、陽氣で、人懐かしさうで、僕のや
うな外國人に對しても隔てるやうな風は微塵も
なく、また、勞働者や職工などを見ても、人に喧嘩を
吹っかけさうな顔は一つも見當らぬ。コンフェッ
チを投合つても喧嘩などになる例し無し。如何にもその生活を楽しん
で居る泰平の民のやうに見える。

オルレアンの少
女、西紀千四百二
十九年英軍の手よ
り佛國を救ひ出さ
んとせし愛國者。

暫くすると、見物がどよめき出した。喇叭の音が幽かに聞
えてくる。行列がルーブルの前まで來たといふ聲が起る。
石垣に腰をかけてゐた連中は皆鐵柵につかまつて立上る。
樂の音が耳をつんざくやうに聞え出した。先登は、日を受
けて金色に光り輝くジャンダルクの記念像の前を過ぎて、
いよゝ、僕等の前に現はれ出した。

僕が今見物しようとする行列は三十の山車、二十の花馬車、
二千五百人の樂隊、三千人の假裝者、二百人の騎馬の男女等
より成立つので、その目覺しさ華かさ、實に想像に餘るもの
である。歐洲中世の騎士の面影を偲ぶ甲の後に長い毛を
下げた市の衛兵三十名が騎馬で先を拂ふ後に續いて、四十

(二) 阿弗利加の北部アルゼリアの兵隊、赤きトルコ帽を被り、赤きたつつけ袴の如きゆるきツポンをはく。

(三) 共に極地探検者。

(四) 北米グリーンランド及び其の他の寒帯地方に住める一人種。

のズーアブ兵士が太鼓笛で賑かに囃し立てながら、練つて来る。第一に現はれた山車は大きな流行帽子を女製造者が寄つてたかつて製へて居るところだ。日本ならば、向ふ鉢巻に勇みの姿で、人間が陽氣に引くところだが、こゝでは、四頭の逞しい馬が悠々と引いて行く。續いて現はれたのが北極探検。中央の北極が廻舞臺のやうに廻轉し、クツクとヘアリーとが互に後からピストルで狙合つて居る。北極の中心には、北極星を現はした少女が不滅の雪を象つた純白の衣を着て立ち、周囲の廻らぬ部分には、エスキモーや白熊などが配置してあり、その間に、ペンギン鳥に假装した人間が踊つて居る。その次に、夜と題した山車が来る。次

には、飛行機が来る。その間に、多勢の假装者が樂隊に合せて舞踏の足取りで進んで来る。

三十の山車の中で目についたものを三ツ四ツこゝに擧げる。一はカバレード、ドラ、ボム、ド、バンとてルイ十四世時代の有名な文學茶屋を象つたのである。此の風雅な茶屋の山車の後から、ルイ十四世當時の扮装をした貴族騎士、官女などが續いて来る。次は革命の山車で、是は凡ての山車の中の最も大なるもので、その前頭には、美しき種を蒔く「白衣の婦人像を飾り、中央には革命に最も關係あるバスチーユの牢獄の半ば破壊されたる光景を作出し、自由平等博愛の三色旗に象つた白衣、青衣、紅衣の三少女がその下に立つて、美

(一) 1638—1715 佛國の隆盛の極點に達したる時代。

(二) 1793 革命軍佛王ルイ十六世を斷頭臺上に曳出して刑に處す。

(三) 牢獄の名前。

(11) ナポレオン一世佛蘭西皇帝となる。

(12) ナポレオン一世の時代。

1804—1810

しい笑顔を群集に注いで来る。山車の後には、革命當時の義勇兵、これに加はれる婦人などの扮装をした幾多の群集が附従ふ。その後から、ナポレオン朝を表はした山車が續く。前頭に立てる馬上の奈翁を護してクレール・ネル・マセナ・ミュラー等の諸將に扮せる假裝者が續く。これらの山車の外に、佛國の歴史を時代分けにした山車、ゴローアの山車、ヘンリー四世時代の山車、これらが順序を追うて進むところは、なか／＼面白い。當時の扮装をした假裝者が馬上に、徒歩に、續くのだから、外國人の眼にはなか／＼趣味深く見える。

これらの行列の間々を、意匠をこらした花馬車が彩る。花

馬車にはいづれも女王と侍女とが乗つて居る。これらの女王は國內の重なる町々の市場から選出された女で、女王の中の女王は、その女王等の中から選抜されたものである。女王の中の女王は、女王の中の女王の山車といふ特別のものに乗る。これが今日の行列の花である。

今年の女王の中の女王の山車は、希臘神話の羽の生えた金色の天馬が空間の征服の爲に「青春」を導いて空中を奔るといふ意匠に成つたもの、女王は青春の象徴で、二十世紀の文明は空間を征服するにあることを表はしたものである。今年の女王の中の女王の月桂冠を得たエリザ、ガイヤール嬢は青の絹に金糸の縫、白い毛皮に黒い斑のあるエルミン

の縁を取つた外袍を豊かに着流して、工風を凝らした高い玉座に著き、遙か下つた前後左右には、十二人の侍女が、光榮の印たる金色の椰子の葉を持つて、半ば花裝飾の中に埋れつゝ、「青春」「美貌」「勤勞」の歌を合唱する。女王は美しい態度で絶えず笑みながら、道の兩側に會釋して、通る。凡ての花馬車の上の女王も皆、この通りに、群集に會釋して、通る。

女王の花馬車の過ぐる處、人は女王を目がけてコンフェッチを投げかける。花馬車の中の花に埋るゝ人も花も、やがてはコンフェッチの中に埋るゝかと思はるゝ許り。あゝ、興ある風情ではある。中にも、僕が忘れ得ぬまで瞬間の美に感じたのは、女王の中の女王の山車の行過ぐる時、向側に建並

ぶ家の二階三階の欄干に集つた娘等が、この山車目がけて蒔散らすコンフェッチの、十二の侍女の色衣の上に、女王の玉座に、金色の天馬に、空より亂れ降る天花の如く散りかゝる光景であつた。

三十の山車二十の花馬車二千五百の樂手三千の假裝隊は、かくの如くにしてわれらの前を過去つた。女王等はこれより更にシャンゼリゼーなる大統領官舎を過り、女王の中の女王は、慣例として、大統領の手より寶石を授けられ、夜は市役所の響應に臨むのである。行列の過去つた後は、兩側に淀んで居た群集が潮のやうに流れ出す。僕も渦卷の中へ巻きこまれて、附いて出た。

(二)

午後六時に、オペラ街のI氏を尋ねると、M氏T氏S氏などが居合せた。こゝで賑々しく晚餐の響應にあづかつた上、グランブールブールの夜の景況を見んとて、T氏やS氏と連立つてオペラ街を出た。

*マドレーヌ寺院よりオムラ前に行く大通りのつき當りに在り。

オペラの前へ來ると、大通はもう寄りつけぬほど人雪崩を打つ、その賑はしさ。今宵はマドレーヌ前から革命記念塔まで十數町に互る、所謂巴里第一のグランブールヴールは、悉く車馬の通行を禁めて、コンフェッチの投合所となつてゐる。

僕等もコンフェッチの袋を買つて小腕に抱へこみながら人雪崩の中に紛れ込んだ。さしにも廣き大道にコンフェッチの雪は早や寸と積つて居る。假裝者も晝よりは澤山にゐる。僕はヴォードヴル座の前で妙な假裝者を見て、これに見入つて居る中に、誰からかコンフェッチを投げつけられた。これを手初にして、こちらからも大に投げた。併し、敵を擇ばずには投がない。目に立つものに出合はなければ投げない。皆用心し合つて居る。用心し合つてゐても投げつけられる。男は帽子から肩から鬚から、女は帽子から、髪から、毛皮から、すつかりコンフェッチだらけになつて興じて居る。巡查を見れば、肩から、帽からコンフェッチを浴びてにこ／＼して居る兵隊も皆投げつけられて喜んで居る。恐さうな顔はどこにも見當らぬ。口笛を吹くもの、放歌をするもの、ギターを鳴らすもの、玩具の樂器を弄す

るもの、これらの雜然とした音響が、女の叫び聲、笑ひ聲、假面賣の呼び聲、コンフェッチの雪を踏む幾萬の蹻音と合して、遠音に大濤を聞くやうに響く。平日その繁華を以て世界の第一位を占むるグランブールヴールの大通も、今宵の如き雜沓を現出する事は一年に只一度のみである。あゝ、盛んなる光景ではある。

僕等は随分に投合つた。幾多の失敗もし、幾多の成功もした。いくら投合つても同じ事である。何も巴里ツ子を氣取つて浮れ廻る（かん）了見は無い、只一の記念を作つて置けばよいのだ。で、僕はT氏やS氏に別れて、十一時半に宿に歸つた。

帽子を取ると、その上に青や紅や紫や、すべての色のコンフェッチが幾點となく附着して居る。外套を脱ぐと、その途端にまた夥しいコンフェッチが落散る。上衣を脱げば、それにつれて、更に雪と散る。チョッキを脱げば、白襯衣を脱げば、同じく幾十片がバラ／＼とこぼれる。肌著を脱げば、身體を滑つて、その幾片はまた床に散敷く。見よ、わが部屋の絨氈の、丸き點々のコンフェッチに蔽はれて、えならぬ花模様を織出した、この美しき光景を。

あはれ、懐しきカルナル祭よ。(幽考集)

一、東京帝國大學法科
大學教授、農學博
士、法學博士。

三、ライオン河畔にある
プロシヤの市にて
大學あり。

◎ 外國語の遣ひ方

新渡戸 稻造

(一)

ボ^三ンに留學してゐた頃、招待を受けて史學會へ行つた。會員が百人近く出席してゐて、其の中には外國人が澤山交つてゐた。まるで、世界の國々がこゝに代表されてゐるやうであつた。日本人は長氏と平氏と僕と三人で、三人一緒に列んで座を占めた。暫時の間交もく、ビールを飲んだりして、それから演説が始まつた。和蘭人が演説をする、亞米利加人が次にやる。次に英吉利人、其の次に波蘭人、今度は露西亞人、その次が墨西哥人といふ風に。

さなきだに目立つ日本人、白人の中に三人も黒い顔を列べて居るのだから、如何で堪るべき、皆吾々に目を着けて、演説を挑む様子。會長の如きも遂に「何方か一つ」と注意にまで及んだ。僕は當時獨逸に來てまだ二ヶ月

目で、獨逸語は、少し讀めるくらゐなもので、演説などは到底も企て及ばぬ平氏は現に二年餘も留學してゐるのであるから、僕は頻に平氏に勧めたけれども、どうしても應じない。長氏はまだ獨逸に來てから二週間許りにしかならず、且、獨逸語は僕よりも解らぬ方であるから、勧めたとて、仕方がない。寧ろ日本語をやつて見たまへと平氏に勧めて見たが、どうしても應じない。兎角する中に、皆頻に吾々に注目して何か相談をして居るやうだから、今に誰か起つたらうと待構へてゐる。中には言葉に出して催促を始めたものもあつた。我が大日本帝國の名譽の昇沈此の機にありとは知るもの、吾々の唇は吾々の愛國心の命令通りに動かぬ。時には限がある、何時までも愚圖としてはをられぬ。立つたら何か出るだらう、マツコトいかぬ時は噓ぐらゐで御免を蒙らうと思つて、僕はイキナリ起ち上つた。拍手が場中に響き渡つた。拍手の靜まるを待つて、僕は僕の知つて居る丈の獨逸語を辛くも繋いで、諸君よ。諸君が若し私の演説を解さるゝることを求めらるゝならば、私は獨逸語で致しませう。諸君が若し私の演説を唯解する丈で十分であると思はるゝならば、私は英語

で致しませう。若し諸君が私の流暢なる辯舌を聴きたいと望まるゝならば私は日本語で致しませう。」と、これだけはどうかかかか破れた獨逸語で云つた所が、とにかく分つたものと見えて、或者は「獨逸語で」といひ、英米人は「英語で」と云ひ、好奇心の多い者は「日本語で」と云ふ。そこで僕は起つたまま、暫く場中を見渡して輿論を窺つた。然るに輿論は更に一定せぬ。そこで僕は、然らば私は三國の言葉を以てやりませう。私の論題は宿醉の説といふのであります。とやると、これも分つたと見えて、大に賛成の聲が聞えた。それから僕は、獨逸語の「カッツエンヤンメル」宿醉は其の原は日本の御伽話より起れる語である云々と、日獨英三國の言葉をマゼコセにして饒舌つた。無論皆分る譯もなし、獨逸語がチヨイと續いて耳を敬てると、直に日本語になつてしまふ、英語で何かいふと思ふと、すぐに獨逸語にかはつてしまふのであるから、一同は見るも氣の毒なやうに當惑した體であつた。此の時、僕は同胞三人の真中に立つて居たのであるが、左に居る平氏の姿を窺ふと、彼は初の中は机に臂を載せて顔を上げて居たが、段々頭を下げて、遂に鼻が机につくまで頭を下げて、縮つて

仕舞つた。右の方の長氏を見ると、此は初は小さくなつて居つたが、段々に頭を擡げて、如何にも獨逸人を一呑みにしてゐるが如き勢であつた。どうして平氏は斯くも小さくなるのだらう、どうして長氏は斯くも大きくなるのだらうと、自分は甚だ不思議に思つた。演説が濟むや否や、平氏が「歸らう」と促すので、共に戶外へ出た。すると彼は、ア、今日程苦しい目に遭つたことは無い。君の獨逸語の拙さといつたら、ない。しかも、その圖々しさには驚き果てた。僕は耻しくて、穴へでも這入りたかつた。今後、あんな事は止めて呉れ給へ。」といふ。すると、長氏はさうか、そんなに下手だつたか。僕は獨逸語はチツとも知らぬから、新渡戸は餘程流暢に饒舌つてゐるのだらうと思つて、僕は大きな顔をして聞いて居つた。といふ。共に大笑しながら、夜半月を踏んで下宿屋に歸つた。

(二)

露西亞や西班牙を旅行した時分、言葉がその真似方さへも出來ないので、大に窮した。かういふ時には、吾々は黙つて居るよりは、日本語でも何でも宜いから、饒舌るに如くはない。

僕は露西亞の聖都見物中、腹が空いて、とある料理屋へ這入つたが、飯を注文するに言葉が通せず、獻立書を見ても字が讀めない。彼此する内に腹は語學に頓着しないで、益々餓を訴へた。こんな時には何でも構ふことはないと思つて、日本語をべら／＼使つてやつた。「オイ、何でも宜いから、温かい甘い物を早く持つて來て呉れ。遅くなつちや困るよ。甘い物で無くちやいけないよ。」先方に通じないのは、勿論承知の上だ。ポイイは唯唯キヨロ／＼して、僕の顔を見てゐる。僕は構はず、のべつにべら／＼饒舌つた。給仕の驚いて呆氣に取られてゐた姿も笑止千萬。西班牙を旅行した時も、屢、同じ筆法でやつた。一體、かういふ場合には、黙つて居るよりは、饒舌の方が遙かに宜いので。どうせ通じないならば、啞者ぢや無いぞ、完全な人間だぞと云ふことだけでも先方へ知らせて置く方が宜い。さうすると、少なくとも不具者ぢや無いぞ丈のみならず、まんざら馬鹿ぢや無いぞ、尤も此點は、やりやうに因つては、却て反對の結果になるかも知れない。といふ證據になるから、言葉の分らない人が旅行する時には、此の筆法は有効である。尤も、此から誤解の起ることはありさうな事だから、

豫め覺悟しておくことが必要だ。(以上二項歸雁の蘆)

二八 日本民族の發展の現状

こゝに一家あり、子女多くして家狭く、同居作業に便ならずとせんか、其の一部は實家を離れて、思ひ／＼に活動の地を求むべし。一國に於ても、亦然り。人口増加し生産過多なるときは、或は領土を廣め、或は移住地を求めて、其の實力を移植す。是を民族の發展と云ふ。

今より約三百年前、寛永年中に、徳川幕府は鎖國政策を行ひて、國民の在外住居を禁じたりき。爾來、幕府時代の間は、人口に大なる變化なかりしが、明治維新以來、人口俄かに増加

して、大正の今日は、總計六千八百萬に至り、寛永享保の昔に比較するに、實にその二倍半となれり。之を面積に配當すれば、一方里一千八百人にして、其の稠密なること、世界の第四位に在り、而も、年々人口の増加すること六十萬に上る。而して、一方に於ては、本州、其の他、舊日本の諸國、開墾周到にして、殆ど手を下すべき餘地なし。日本民族の發展は實に自然にして、已むを得ざる者なり。

明治の初、政府は蝦夷の地を改めて北海道とし、開拓使を置きて内地人の移住、開墾を獎勵せしが、當時移民事業の經驗のなかりし爲にや、其の成績拙々しからざりしが、近頃は年五六萬の移住者あり、多くは農業に従事せり。

日清戰役の結果、臺灣は我が領地となり、今や製糖製茶の本場として南方發展の好適地となりをり。

布哇王國は甘蔗の栽培を盛んにせん爲に、曩に大に日本人を歡迎し、日本人の彼の國に移住せしもの頗る多かりしが、明治三十一年布哇の米國に併合せられし後も、なほ日本人は續々移住し、現今その總數六萬に餘り、布哇全人口の三分の一を占む。

布哇併合の數年前に米國が支那人の移住を禁ぜしより以來、日本人の米國に移住する者頗る多く、その大多數は太平洋岸のカリフォルニア州に住居せり。多くはその地の農工業者に雇はれて勞働に従事せるが、間々大なる農園を所

有して自ら栽培を營む者もあり。總じて、米國は我が在外人民の最も多く居留する處なるが、近來、彼の國人は東洋人の入國を悦ばず、我が政府をして移民制限の内約をなさしむるに至れり。英國の植民地なる加拿太・濠洲にも往々「排日」の聲を聞く。憾むべし。

近來、南米のブラジル・アルゼンチン・チリに移住する者漸く多し。

日露戰役の後、樺太我が領土となり、南滿洲及び東蒙古の經營我が手に歸せり。我が官民合同して南滿洲鐵道會社を組織し、鐵道・鑛山・商工業其他、有らゆる富源を開發し、及び支那人を利導すると共に、各國に向つて門戸を開放せり。

この外に、日本人にして上海・漢口等、楊子江沿岸に居住して商工業を營む者あり

朝鮮に向つては、夙くより移住する者あり、釜山浦の如きは已に殆ど日本化したりしに、明治四十三年併合の後、東洋拓殖會社組織せられて、益、移住起業に便宜を與ふ。

最近、世界戰爭に於て、我が國が南洋に於ける獨逸領諸島を占領してより、國內の人心一時之に嚮ひ、争ひて渡航してゴム・コブラ・燐礦肥料等の南洋物産を經營せんとせり。是より先、日本人の遠く馬來半島に赴きてゴム栽培等に從事する者あり。

此くの如く、日本民族は後れ馳せながら、今や東西南北の諸

方に發展しつゝあり。世間或は日本人を稱して孤立排他の性質ありとし、日本人亦自ら認めて然りとする者あり。然れども、こは徳川時代の鎖國より生ぜる一時の現象にして、日本民族固有の性質に非ず。日本人は世界中最も猜疑嫉妬なく、最も人種的偏見少なき民族なり。遠き昔の事ながら、天孫降臨・神武東征の時より、先住民の優秀者「國つ神」を愛撫して、適處に重用し給へり。穴居して果實と蝦蟇とを食したりし吉野國栖は、應神天皇の御前に嬉遊し、天皇を親みて「まろがち」即ち「吾が父」と稱せり。天孫種族は決して劣等種族を迫害せざりき。

後世に至りては、山田長政が日本移民を率ゐて暹羅を助け

しが如き、最も著明なる事實なり。西洋宣教師等の横暴は徳川幕府をして鎖國政策を行はしめたれど、當時の公平なる洋人は大抵日本人の叮嚀深切なるを稱讚し、日本をして鎖國政策を取らしむるに至りしは、其の原因を民族の特性に歸すべからず。」と云へり。されば、北海道及び樺太に於ては、將に消滅せんとする土人を保護・教育し、臺灣及び南洋に在りては、土人の従順なる者を導きて其の見聞を廣めしめつゝあり。苟も他の猜疑嫉妬なからしめば、日本民族何れに發展してか可ならざらん。

日本民族の發展をして多望ならしむる原因猶多し。人口増殖率は其の主要なる者なり。既に云へる如く、我が人口

大正八年二月二十日
 教育部
 高等女子學校國語教科書

訂四 女子國語讀本 全十冊

明治三十四年一月十一日 訂正 發行
 明治三十四年二月十一日 訂正 發行
 明治三十四年三月十一日 訂正 發行
 明治三十四年四月十一日 訂正 發行
 明治三十四年五月十一日 訂正 發行
 明治三十四年六月十一日 訂正 發行
 明治三十四年七月十一日 訂正 發行
 明治三十四年八月十一日 訂正 發行
 明治三十四年九月十一日 訂正 發行
 明治三十四年十月十一日 訂正 發行
 明治三十四年十一月十一日 訂正 發行
 明治三十四年十二月十一日 訂正 發行
 明治三十四年一月十一日 訂正 發行
 明治三十四年二月十一日 訂正 發行
 明治三十四年三月十一日 訂正 發行
 明治三十四年四月十一日 訂正 發行
 明治三十四年五月十一日 訂正 發行
 明治三十四年六月十一日 訂正 發行
 明治三十四年七月十一日 訂正 發行
 明治三十四年八月十一日 訂正 發行
 明治三十四年九月十一日 訂正 發行
 明治三十四年十月十一日 訂正 發行
 明治三十四年十一月十一日 訂正 發行
 明治三十四年十二月十一日 訂正 發行

大正八年
 定價
 卷一、二、三、四、九、十
 各金五拾貳錢
 卷五、六、七、八
 各金四拾貳錢

複製許

定價
 卷一、二、三、四、九、十
 各金參拾六錢
 卷五、六、七、八
 各金參拾錢

賣捌所

發賣所

東京日本橋區本町三丁目十七番地

各府縣特約販賣所

金港堂書籍株式會社

東洋印刷株式會社

原亮一郎

金港堂書籍株式會社

岡田正美

篠田利英

小島政吉

吉田彌平

訂四 女子國語讀本卷八終

年々の増加は約六十萬、其の増率は百分の一前後にして、世界の中位にあり。而して、徐々に向上の勢を示せり。此の増率をして速かに向上せしめ、日本民族の競争に利せんには、公衆衛生の改良固より必要なるべく、殊に家庭衛生の進歩は更に重大なる効果を致すべし。家庭衛生の進歩とは何ぞや。家人、特に、婦人の健康の増進、育兒及び食物の研究改善等是なり。思ふに、太陽の照す所、日本民族をして到る處に榮えしめんことは、現在並に、將來の日本婦人の力に依るもの多かるべし。

四訂女子國語讀本卷八

卷之七

西
松

九

